

93-301

田山花袋著

生

平	結	和	橋	石
福	城	田	本	井
百	索	三	邦	柏
穗	明	造	助	亭

畫

この書を柳田國男氏に呈す

生

田山花袋

「今晚嫁入があるッてな」

「何處で？」

「すぐ此の下の家で」

「下の家ッて何處だい」

「そらあの酸漿を鳴して通る白髪のお袋さんの居る家さ」

「よく彼處では嫁入があるな、この御正月にもあつたぢやねえか……。そ

生

れに、あのお袋さん病氣が悪くつてとうから臥てるツて言ふぢやねえか」
「御正月のは弟の嫁だアな。そら、ぢきあの裏に居るアな。色の白い肥
つた八丈の羽織などを着てよく通るぢやねえか。今晚來るていのは、そ
の兄貴の嫁さんだ」

「兄貴の？さうか、毎日洋服を着て役所へ行く？」

「さうよ。優しい人柄な熊公のよく挽いて行く旦那だ」

「あの旦那にや女房があつたぢやねえか」

「なアに、あのお袋さんの氣に入らねえで、昨年出して丁つたアな……あ
のお袋さんあれで中々難かしいから」

「さうかな、優しいさうなお袋さんだが……始中終酸漿を鳴して、莞爾して
通るが……」

「さうよ、鳥渡見ると、人柄な好い婆様だが、あれで中々豪い氣丈者だツて
言ふから」

と言ひ懸けて、植木職の定公は、ぢやぶくと手拭で顔を洗つた。早稲田
に近い牛込の喜久井町柳の湯では、今洋燈が點いたばかり、戸外はまだ薄
明るかつた。夕飯時の客は、少く三助は空いた桶をがたんくと流しの
一隅に片寄せて行つた。八歳位の年にしては、丈の高い一人の子供が、今
し湯から上り懸けて頻りに身體を拭いて居たが、そとくと衣服を着て、
帯を巻き附けて戸を烈しく閉て、出て行つた。

「今出て行つたのが息子だアな」

「さうかあれが……」と相手は點頭いて、

「あの旦那にあんな大きな息子があるんか。」

「何でも先妻の子だツて言ふ話だ。」

「先妻ツて、此間まで居たのは、まだ若かつたぢやねえか」

「あの前の前の先妻の子だ」

「や、それア大變だ。随分澤山な女房持ちだナ。」と顔を手拭で撫で廻し

て、「女房もさう澤山持つたら好いだらうな。」

『本當よ、己達のやうにしつかりとこびりつかれて居ちや遣り切れねえ。偶にや一ほつくり参つて、後の若いのていなやうな幕も打つて見ていな』

と合槌を打つて笑つた。

客の無い廣い流しには、洋燈がぼんやりと點いて、置湯の漲る音が静かに聞える。女湯にも一人か二人の客らしい。

『ちや、何うせ大年増だ』

『それア當り前よ』

『嫁入つて聞くと、何だかかう自暴に氣が若くなるやうな心持がするが、大年増のひね旦那ちや始まらねえ』

『別嬪だよ』

『ちやらつばこ言ひねえ……知りも爲ねえ辨に』

『だって、あの家の隣の若夫婦の媒妁だつて言ふせ。何でもあの若い神さんの友達だつて言ふから、滿更でもあるめえと思つてよ。』

『馬鹿言ひねえ、紺屋の神さんのやうな別嬪にも、己の嫁のやうな友達が居らア。はッはッ』

面白さうに二人は笑つた。

もう日は暮れた。客が一人入つて來た。

『入つしやい』といふ番臺の女の聲が高く四邊に響く。戸外を荷馬車の通る音がたたくと聞える。五月は下旬、空氣の濕つばい暖かな晩であつた。

柳の湯から少し行つて通を曲ると、柴垣、枳殼垣、冠木門、庭樹の鬱蒼と茂つた古い藁葺の家が一軒、それからだらりと下り坂になつて、盆の底の

やうな卑濕地には早くも夜霧が闇に微白く靡いて居た。老いた蛙の聲が耳を聳するばかりに聞えて、雨催ひの空は暖かく、星の影は一つも見えない。この盆の底のやうな處は、曾てはさる大名の下邸の庭の泉水で向ふに靡く低い丘は立派な築山であつたといふ。潰れた邸の址は久しく鏡地になつて居て、其泉水の縁を縫つて早稻田南町に出る細い路は悪戯をするものがあるのと質の悪い野犬が居るのとで、日が暮れてからは女などは殆んど通らなかつた。かうして唯鏡地にして置くのは惜しい、開墾して麥でも播かうとある百姓の老夫婦が思ひ立つて一坪二厘の地代で其一隅を借りて、肥溜の小屋を造つたのは、それから餘程後であつた。日清戦争の少し前には、或山師が近郊の避暑地の流行から思ひ附いて、見晴が好いのを利用して、築山の下の樹蔭に小屋掛をして細い瀧などを落して、麥酒の煙を清水に浸したこともあつたが、二年と續かずに失敗して止して了つた。原には春は野萩蒲公英、嫁菜などが出た。紙鳶のうなり

も聞えた。通行する人は誰も好い惜い地所だと思はぬは無いが、さりとて此の廣い鏡地に手を着けやうとするものも無かつた。處がある日突然大工の棟梁らしい男が羽織を着た旦那らしい鬚面と一緒に此原に来て、篠笹の鏡地に頻りに繩を引き始めたが、二三日經つと鉦の音が珍らしく聞え出して、二三人の大工の甲斐々々しい姿が其處に見えた。新しい木材の匂が風に乗って吹かれて四邊に散つた。で、原の中央に一軒西北の一隅に二軒新しい貸家は建てられて、原を往來する人々は其路の賑かになつたのを喜んだが、斜に張られた貸家札は徒に雨風に吹曝されて、久しく住む人の影も見えなかつた。それから一二年經つた。原の中央の家は少くとも借手が三度變つた。角にある老梅樹は三代將軍が鷹野の歸途此大名の邸に御立寄になつた時手づから植ゑられたもので、其下にある大きな花崗石は、將軍が其時腰を懸けられたものだ相だが、其梅樹は年々美しく花を着けて、路行く人々

の袖に蒸る。丁度春先のある暖かな日、目隠しに植ゑた檜、樅、椎などの繁つた間に、箆筒やら長持やら書箱やら勝手道具やら籠やらを載せた引越車が三臺ほど引込まれてあつた。一月ほど空いて居た此家は新に主を得たのである。半白の中背の人柄な母親が先に立つて働いて嫁らしい赤い手絡を懸けた若い丸鬘が頻りに井戸に出て水を汲んだ。主人は髯の濃い三十三三の柔和な男で、二十四五の髪、長い色の蒼白い神経質らしい弟と一緒に、箆筒書箱などを室内に運んだ。

喜久井町から早稲田の通は、まだ其頃は淋しかつた。家屋の絶間には、麥や菜の畑が青々として、雲雀が鳴いて居た。引越蕎麥は早稲田の穴八幡の前の蕎麥屋が配つた。四疊半の離座敷を弟は自分の書齋にして、壁に面して机を据ゑて前硝子の書箱を其の傍に置いた。雑誌、新刊物などの中に洋書が五六冊交つて入つて居た。一間の押入の中には上に寢道具下には古雑誌、古反古、古原稿を荒細で一括りからげたのを、其儘無造

作に投り込んだ。

主人は最後に植木を庭に移した。亡父が生前に此上なく愛して居たといふので、熊々田舎から携へて来た『大神樂』といふ椿は、都會生活の度々の移轉に生長する暇もなく、葉も枝も萎れ果てゝ居た。其他、霧島躑躅、萩寒竹、里沙門の縁日で買つた木犀——尻を端折つて、一生懸命に鋏で土を掘つて居る主人の姿は、夕暮の空氣の中に分明と見えた。そして其時五歳になる先妻の男の兒は何か無邪氣なと言ひながら、はつちやけて庭を遊び廻つて居た。で、それが濟むと、主人は縁側に置いた釘箱と金槌とを取つて、小さな門に古びた郵便受兩と標札とを打つた。標札は

禿びた字で——『吉田寓』

風の吹く日は、裏の雨戸は明けられなかつた。八疊二間、續き、玄關、疊、古箆筒の上に佛壇が置かれて、其上に神棚があつた。主人は何時もの背廣の洋服を着て、原の路を丘と田との間に添つて通つて、淡竹の大

彼方にてくくと出て行く。そして五時過には、夕日に向つて共同道
を歸つて来るが、其頃は丸輪姿の若い妻君が屹度其道に向いた井戸端で
頻りに米を炊いで居た。弟は四疊半の書齋に籠つて終日書を讀んだり、
筆を執つたり所謂神來の想を得る爲めの樂寢に耽つたりして居た。渠
は戀と文學とを一緒にして、そして美しい夢を見て居る青年の群であつ
た。時々同じ夥伴の友人が來て文學談から宗教談、難かしい人生問題、其
論争の聲は垣の外を行く人々の足を停めた。

母親は其頃五十一二であつた。士族が祿を失つた維新前後の浮世の
大波を被さながら、早くから夫に別れて難かしい舅姑の世話多い子供等
の教育忍耐に忍耐した不満の情は今に及んで一種峻しい荒涼たる性格
を形つくつた。望を懸けた子供等が一人は役所の下級官吏、一人は物の
役に立ぬ空想家、一人の娘は田舎の貧しい機屋の細君、息子共が成長くな
つて東京に出られるやうになつたらといろくに樂んだ美しい空想は

片端より脆くも崩れて嫁は職だらけの手、世の常の大きな足それにちや
ほやする長男を見ると、むしやくしやせずには居られなかつた。で家庭
の衝突を重ねて、初めの嫁は初兒の産聲で倒れて了つた。

其初兒を母親は抱寐をして育てた。
上顎の齒が大方抜けて何だか緊が無い處から酸漿を鳴すのが習慣に
なつて後には丹波酸漿の木を庭に植ゑた。八月には鈴生になつた其酸
漿の赤い色が美しく庭を飾つた。

其頃日曜日には母親は屹度支關の三疊の高窓から顔を出して喜久井
町の通に出るだらけ坂を眺めて居た。やがて靴の音、劍の音と一緒に
背の高い活潑な士官候補生の姿が顯はれる。「そら秀雄が來た」といふ。
其母親の顔には喜びが溢れ渡つた。母親の最後の希望は此三男の勇し
い軍人姿に懸られてあるので、自から呪ひ自から傷けた荒涼たる生活に、
糧でもあり花でもあるのは此唯一の士官候補生であつた。で、日曜日の

みは賑かに樂しげに送られた。餅菓子菓物蕎麥饅飯の旨いのが馬場下にあるのを母親は自づから使に行つて買つた。快活なる軍隊生活勇ましい練兵と術科家庭の小さい紛紜などは何うでも好いと謂つた風な物語は單に母親の荒涼たる心を暖めるばかりではなかつた。淋しい暗い家庭に、一週一度の此光明を誰も皆待つた。

『お前が來て呉れると母様の機嫌が丸で變るんだから……日照には成べく來るやうにして呉れ』などと主人の兄が謂ふと、

『矢張母様は難かしいかナア。何うも困るナア。何故彼様になつちやつたか。本當に家の採める位つまらんことはない。』

そして空想家の兄の書齋に入つて行つては、『銃ちやん兄さんとは決して言はなかつた何か面白い小説本は無いかな』と言つて其仲兄が髪を長く色を蒼く神経性な瘦せた顔をして一生懸命にセンチメンタルな

冗漫な誇張した長い憧憬小説を書いて居る傍に寝そべつて雑誌やら小説やらを無造作にひつひも返して面白さうなものがあると講談であらうが探偵物であらうが海外露伴の難かしい小説であらうがそんな區別には頓着せずにくすぐ讀耽る。

銃之助の抱負では軍人などを豪いと思つて居なかつた。今に見て居る傑作を作つて天下を震撼させて呉れる。不朽の名を明治文學史上に刻んで呉れる。かう思つて居る。けれど軍人の暢氣な快活な生々した生活は羨しかつた。暗い家庭に居て朝から晩まで痛い小さい衝突に神經を昂らせて其揚句に辛い辛い机の上の煩悶生理上の烈しい壓迫も愈愈其頭腦を不健全にした。愛醜な我儘な正直な臆病な性質を渠は最も多く其母親の血から承け繼いで居たのだ。

母親の愛醜な顔の一線の動いたのにも渠はすぐ胸を曇らせた。士官候補生の制服軍帽短かい劍——その暢氣な生活が堪らなく羨し

い。門限が来ると言ふので次の日曜を約して夕暮に其弟が歸つて行く。母親は玄關の高窓から其後姿を見送る。渠は書齋の前の障子を明けて、だら／＼坂を急いで上つて行くのを見て居る。軍隊の生活寢臺の上から落ちた話消燈喇叭が鳴つた後も西洋蠟燭をこつそり點けて勉強するといふ話さま／＼の話が思出されて胸が一杯になる。郊外の秋の美しい日の光に浴して兵士の群が彼處に一團、此處に一團、餘念なく演習を遣つて居るのを見て、かうした無邪氣な快活な生もあるのだと思つて熱い涙を流したことをも思出した。

日の暮れる頃わアツわアツと言ふ聲が聞える。これは士官學校で生徒が食後の運動の爲め號令の練習を遣るのである。其頃初めて牛込に住んだ人々は必ず一度は此聲の何なるかに驚く。現に此一家族も田舎から出た時には其耳を疑つたのである。此聲の聞える頃漸く洋燈が光を放つた頃其時分が一番佻しく一番暗かつた。生の荒涼から覺え

た晩酌を母親はいつも遣るので難かしい顔は既に赤くなつて居る。皮肉な我儘な道理も何も無い小言が平生沈鬱な母親の口から出るやうに出で、其矢面に主人と若い嫁とが立たなければならなかつた。いつものこととて大概は柳に受けて開流しては居るが其皮肉がいかにも勁烈なので時にはいかに優しい主人も黙つて居られなくなる。田舎出の若い細君は飯も咽喉に通らぬといふ風で、勝手に立つて行つて顔を障子に押付けて泣くことなどもあつた。

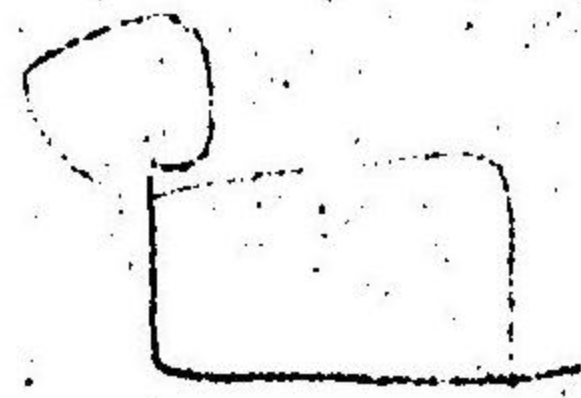
暗い洋燈の下に長火鉢膳碗鍋處々破れた障子佛壇も神棚も總て闇で、嫁の持つて来た前桐の安筆筒のみが白く室の中に目立つて見える。銚子の助はこれが始まるとそ／＼と急いで飯を済まして了つて、すつと立つて書齋に入つて了ふ。兄や嫂の身にしては何とか母親をなだめて呉れても好ささうに思はれるが、かれの神経質では醜い其の光景に堪へ難いので暗い洋燈の光と母親の赤い峻しい顔を見ると、此世も盡くるかとは

かり辛く悲しかったのだ。
机の前に坐つて、

「傑作！傑作を」と心に叫んだ。

時はさうして居る中にも経つた。兄の毎日の役所勤め、弟の絶えざる文學上の勞作、若い細君は難かしい姑に睨まれながら朝夕の炊事、汚れ物の洗濯、酒屋、肴屋、豆腐屋、八百屋の中老漢は落合あたりから車を挽いて毎朝遣つて来る。小松菜、蓮根、慈姑、葱、甘藷、秋から冬に懸けては漬菜や干大根を山のやうに積んで、老母の裁縫をして居る縁側に來て、廉く負けるからと言つて二樽ほど賣つた。

山の手も段々と開けた。鉦の音が到る處に聞えて、新建の貸家が日増しに殖える。原ではだら／＼坂の西の臺地に二階造の和洋折衷の大きな家屋、續いて其上に茅葺屋根の寺のやうな家屋が建てられた。其長い縁側には綺麗な娘が派手な帯を締めて、色白の顔を浮彫のやうに見せて、



四邊の好眺望を眺めて居た。

隣の敷地が五十坪ほど切開かれて、やがて小さい三間位の家屋が建つた。小さな門、小さな庭、小さな入口、何ういふ人が入ることかと評判されて居たが、母親がある日、銚之助に、「お前のお隣には別嬪さんが來たね」と笑ひながら言つた。母親は今少し前色の白い、二十五六の髪を花月巻に結つた女が其處から出て來るのを見たのである。

其翌日引越車が三臺來た。箆筒と書箱とが殊に目に立つた。越して來たのは、早稻田の法科に籍を置いて居る三十男で、昨年まで地方で基督教の傳道に従事して居たが、生活問題に不安を感じ始めて、新に法律を學ぶ爲め、質素な生活を此處に夫婦して始めるのであるといふことが段々解つた。妻君は小づくりな色の白い、可成の美人で、子が無い故か、すべてが年に較べて派手つくりで、紅い帯揚に、メリンスの半襟、顔にはいつも白粉をべつたりと附け居た。前の井戸で一緒になるので、やがて懇意に

なつて其細君の母親だと謂ふ人の好い眼の悪い老母が折々吉田の家に訪ねて来た。

『あのお婆様には困るよ。話が長くつてくどくつて、そして長座だからねえ。あゝいふ用の無い閑人はあゝして居ても好いかも知れないけれど、私のやうに嫁の世話から孫の世話まで爲なけりやならんものには、とても交際は出来ない』などと吉田の老母は滴して居たが、それでも時々々は其家に自から出懸けて行つて、其老母よりも若い細君を相手に一時間も長話をして來ることなどもあつた。

四邊は益々開けて、新しい家屋は原を縁取つて幾軒か出來た。淋しかつた道にも往來が繁く、野犬が居たり、悪戯をするものがあつたりした時代は何時のことかと思はれた。二階屋からは家の娘の弾く琴の音が聞え、近所の家からは軍人の細君らしい若い女が盛装して出て來るやうになつた。

三年は經過した。

此間原の家では家庭の衝突は同じく絶えなかつたが、前後に事件が二つ起つた。一つは三男の士官學校卒業の祝、一つは若い嫁の生兒の死に續いて起つた離縁騒ぎ。

吉田秀雄は優等で學校を卒業した。老母は一生の晴れだと言ふので、其卒業式には態々白襟の紋附を造つて晴々しい氣色で列した。子息のことを人に誇るやうな甘い性質ではなかつたが、此時のみは逢ふ人々に其末子の成功と幸運とを語つた。秀雄は高崎の第十五聯隊から士官學校に入學したのであるが、丁度其時日清戦後の軍備擴張で、弘前の第八師團が新設されたので、急に第三十一聯隊附を命せられた。東京に居られぬのを母も當人も残念がつたが、何うすることも出来なかつた。新しい少尉の軍服軍帽目に眩するやうな立派な劍非常な入費も戸主だからと言ふので、總領の兄は無理算段送して調達して遣つた。そして其月の末

には弘前に發つた。

若い嫁は其翌年の六月懐妊して、其翌々年の三月男の兒を産んだ。主人の喜悅は一通でなかつた。これで家庭もいくらか圓滿になるであらうと思つた。銑之助もさう思つた。ところが四月のある朝、ゆくゆくなく其生兒の冷たくなつて居たのを發見した。父母の涙は盡きぬのにも間もなく離縁話が持上る。細君の實家の親戚からも強硬なる態度の談判が續く。其六月には、其細君の姿は遂に此の原の家に見えなくなつて、井戸端には老母が桶を下げて水汲に出た。

丁度顔を合せた隣の細君が、

「お雪さん、何うか爲さいましたか？」

と訊く。

「あれは一昨日實家に戻して了ひました」

「おや、まア！左様ですか」と吃驚して老母の顔を見て、「ちつとも存じ

ませんでした。此頃御見えにならないから、何うかなすつたかと存じて居りました……」

「馴れたものですから、あんな不肖なものでも成らうことなら置いて遣り度いと存じましたけれど……此間のやうな人様に御話も出来ないやうなことで御座いますからねえ、いくら眠いからツて自分の子を……ねえ、貴方……」

「本當にねえ……」

と隣の細君は返事に困つた。

總領の兄は名は鏡と言つた。明治十八年頃の書生立で下級官吏の生活と貧しい家の事情とが若い頃の功名の念をも銷磨し盡したといふ風。座敷にある古書箱の中の漢學、國學、歴史學の數多い書籍は明かに其人の半生を語つて居た。机の上には座が堆く、硯箱の蓋も滅多には取らうともせぬ此頃の狀態を見るにつけても、銑之助は家庭の爲めに犠牲に

なつた此兄の心を傷ますには居られなかつた。銑之助も秀雄も此兄の口からこそ功名の念を吹込まれ人間としての理想をも教へられ孤往獨邁の尊い精神をも鼓吹せられたのだ。早くして父を喪つた兄弟は此兄を師とも父とも頼んだのである。であるのに、一度世の中の實際に觸れて、水の如く解け去つた其理想其精神！まだ世に出ぬ身の好くは解らぬが銑之助は少くとも餘りにその腑甲斐の無いのを惜んだ。さうしてでなくては渡られぬ世の中ならいつそ今の中に自殺して死んで仕舞ふ方が本望だとまで感情的に心中に絶叫したこともあつた。役所に出勤して歸つて飯を食つて母親に小言を言はれて妻と一緒に早く寐て一月を一圓か二圓の小遣で満足して偶に金が入ることがあればこつそり遊廓に出懸けるといふやうな平凡な生活に何して甘んじて居ることが出来るかと疑つた。四疊半の書齋に閉籠つて空想にばかり耽つて居る渠には人間の中年の平凡なる苦痛などは解らう筈がなかつた。

妻を離縁した後主人はよく家を空けた。三晩位續けて歸らぬこともあつた。丁度其頃或書肆の歴史編纂の手傳を爲て居たので錢廻りは好かつたものと見える。母は半は憂ひ半は怒つた。歸つた顔を見ると安心はするが羽織でも洋服でも、『何處の馬の骨が觸つたのだから解らん』などと謂つて碌々疊んで遣りもしない。時々機嫌を取る氣で『旨い西洋菓子などを買つて來ても、『そんな見え透いた御世辭の菓子などは食ふと口が汚れる』と言つて手にも取らずに庭に捨てた。子息の心底から思つてする行爲も母の眼には通り一遍の御世辭で、『録の猫撫聲は油断がならん。腹では何を思つて居るか知れはしない。あんな腹の黒い男は澤山ないぞえ銑なども用心しろ』など、聞えるやうにつけ、言ふ。後には馴染から手紙がよく來た。銑之助は初めは母に見せまいと思つて自分で受取つてこつそり兄の机の抽斗に入れて置いて遣つた。けれど其手紙がいかにも多い。日に二三通づゝ來る。で或時何んな事が

書いてあるものかと思つて自分の四疊半に持つて来て所謂神聖な戀愛小説の書きかけの原稿の上で封を截つた。金釘の解らぬ字で嬉しがらせた文句が一杯別に白い紙に裏に薄の生えた拙い繪がなすくつてあつて恨めしいと書いてある。銃之助は女郎の手紙の殺風景なのに呆れざるを得なかつた。それからもう願みやうともしなかつた。兄は？と見ると兄も其手紙の封を截つたことは滅多に無い。机の抽斗は其手紙で一杯に爲つた。

三

また一年経つた。

喜久井町の通にはミルクホールが出来た。畑を潰して蕎麥屋西洋菓子屋米屋などが軒を並べた。原にはまた一軒新建の家屋が殖えた。二階屋の前の空地にも四間位の鳥渡した貸家が建てられて新聞記者だと

いふ若い美しい細君を持つた人がすぐ入つた。原の家でも大なる變遷があつた。九月に次男の銃之助が四疊半の書齋から出て裏の三間の小さい家屋を借りた。十一月頃から老母は兎角氣分がすぐれなかつたが、年を越すと段々容體が悪くなつて醫師の口振では不治の盲腸炎であるらしい。一月には銃之助は足元から鳥の立つやうに急に思立つて自から進んで妻を貰つた。花は咲いて散つた。老母の容體は益々悪い。親戚から娘が手傳に来る。主人の獨身を目的に旨く行つたら後添にならうといふ特志の中年の下婢が白粉をべたくと顔に塗附ける。裏の家からは新しい嫁が毎日絲織の着物に黄八丈の羽織といふ若々しい扮装で見舞に来る。別の家かと思はれるやうに賑かになつた。

今度は隣の夫婦の媒約で主人の嫁が來るといふ。

四

其夜原の家の高窓は夜霧の微白い闇を隈取つて明るく見えた。何時も早く戸を閉める長い縁側にも人の影が往來して庭樹の葉裏に座敷の燈光が流るゝやうに射し渡つた。今少し前嫁の道具が着いて箆箆やら鏡臺やら行李やらを人々が寄つてたかつて奥の座敷に運んだが、それも済んで今は嫁の君の一行を待つばかり。蛙の聲が間断なしに聞える。暖かい濕っぽい空気がしつとりとして、葉を出し初めた芭蕉の夜風に戦ぐ音がをり／＼四邊に響く。高窓に接した勝手元では今宵の料理の準備に忙しいと見えて膳碗を扱ふ音物の落つる音流元の水の音けたましい笑聲も時々起つた。今少し大丸盤に結つた家婢は大和障子を明けて、兩手に桶を提げて柴垣に添つた細い路を前の井戸端へと水汲に出たが不圖氣が附くと其傍に今から半年ほど前此家に周旋して呉れた老母の姪に當る四十格好の女が立つて居た。

「まア吃驚した。誰かと思ひましたよ」
 女は手で制して小聲で、
 「とう／＼かういふことになつてお鐵さんには本當に御氣の毒……」
 「いゝえ、私なんか……」
 「でもねえ、難かし家ですからねえ、却つて好かつたかも知れない。」
 「いゝえ……」
 「叔母があゝだから、本當に困るよ。今度の嫁さんだつて、また屹度酷められるに定つて居るからねえ。」
 お鐵は此女が此處に周旋して呉れる時、口を極めて、其主人の温情家庭の平和を説いたことを思出した。
 「鐵さんは善い人だねえ」
 「えゝえゝ、旦那様は本當によく物の解つたお方……でなけりや、私などはもうとうに何處かに行つて居りました。お駒さん、私は随分酷いと思

つて、口惜しくツて泣いたこともありすからねえ。お駒さんの叔母様ですけれど、御年寄は本當に酷い方ねえ、何ぼ私だつて押付嫁に來た譯ぢやありませんし……そりやこんな至らぬものでも旦那様の御氣に叶へば……と思つたばかりですもの』

『左様ともねえ本當に。』

『ですのに、鳥渡でも旦那様と話しても爲て居やうものなら、それや大變怖い眼で睨まれて色々なことを言はれて旦那様にまでそれは酷く當るんですから』と言懸けて、『旦那様は本當に御可哀相……』

大丸盥に結つて自分から家婢の積りではなく、いろ／＼心から世話をして遣つたことを思出した。幼稚い時天然痘に罹つて鏡をも見る氣にはなれぬ痘面、それを氣耻しくもなく、紅やら白粉やらを塗りつけたことをも思出した。女は容色が悪くては何んなに正しい心を抱いて居ても振向くものも無いのかと思ふと悲しくもなる。

なぐり

少時して、『私本當に今度はいお嫁さんが來れば好いと思つて居ますよ。お話を伺ふと旦那様は随分不幸福な方ですものねえ』
『本當ですよ、學問が出來て、何一つ知らぬことは無くつて、親孝行で優しくつて、それは好い人なんですから』

『本當にねえ』

提灯の火が坂の上に見えた。嫁さんではないかと思つたが、さうではなかつた。

『お嫁さんを見たことはないの？』

とお駒は訊く。

『え、え、此間ね、お隣で見合をするツて言ふ時、何うかして見て遣りませうと思つて、それは骨を折つたけれど、後姿を鳥渡見た限り。』

『何んな女？』

『背のすちつとした糸織の鐵が、つた衣服を着て居ましたよ』

「お隣の奥さんの友達ですッてね」

「え、國でお針と一緒に行った友達ですッて。前の亭主は船乗で、始中終家に居ついたらためしが無く、偶に歸つて來ると、新潟の女は何うだの長崎の女は何うだのッて、そんなことばかり言つてるんですッて。道樂者には懲々したから、何んな苦勞でもするから、しつかりした亭主を持ちたいと……」

「お鐵さん、お鐵さん！」

と呼ぶ聲がする。

「お母さん！何處に行つてるの？」と續いて、若々しい聲がして、今歳十六になるお駒の娘が其姿を半ば勝手口から現した。

「二人は何してるんだらう、此忙しいのに……」といふ聲が戸内でする。

「はい、今行きますよ」

戸内に入ると、勝手は戦場のやうに混雑して居る。仕出屋の料理、さし

み皿、吸物椀、お平栗のきんとん、酒樽が傍に轉つて居るかと思ふと、七輪には鍋が湯氣を白く立て、沸くり返つて居る。引物の青い籠には大きい蛤と鯉節が入られてあつて、茶の間では花婿の主人が平生の衣服で、車夫に遣る祝儀を一生懸命に半紙に包んで居た。

羽織袴の銚之助が其處へ遣つて來て、

「兄さん、そんなことは誰かに遣らしたら、好いちやないか、もう來るよ、早く衣服を着替へないと……」

「うん、よしよし」

と言ひながら頻りにそれを遣つて居る。

「本當にサ、早く」

「うん、よし」

媒妁役の隣の主人が同じ羽織袴で遣つて來て、また促し立てた。で、主人はそれを親戚の男に頼んで座敷に行く。其處には羽織袴、衣服、羽織の

紐、白足袋などが整然と揃へてあつた。前の細君と結婚した時も此羽織に此袴に此衣服であつた。斜子の羽織の紋は黄く汚れ、仙臺平の袴にも處々汚點が附いて居る。お駒が來て手傳つて襟の具合などを見て遣つた。

座敷のさまがまた面白かつた。床の間の八疊には、紅入メリンス、黄八丈など近所から借集めた座蒲團が不揃に並んで、煙草盆と火鉢とが打交せに置いてある。嫁の箆笥は新しく鏡臺の鏡は光つて、ニッケル臺の空氣洋燈は眩ゆいほど室内を照して、今少し前まで不治の病氣に罹つた母親が寢て居たとは思へぬ位明るかつた。銑之助の結婚の時には母親は床を疊んで、三男の士官學校卒業式の時に拵へた紋附を着て、晴々しい顔色をして席に連つたが、今は長く座に堪へぬので、一時其寢床を四疊半の離座敷に移したのであつた。茶の間の八疊は古文書の銅版を貼つた二雙屏風と古い先祖傳來の四雙屏風で中央を旨く仕切つて、陰に長火鉢やら

料理やら膳椀やらを混雜と置いた。玄關の三疊から此八疊を経て客間に通るやうにしてあるのである。

銑之助が別居してから、離座敷の四疊半は其儘主人の書齋となつたが、青年空想家の會で住んだ名残として、ダントの肖像とハイチの肖像とが壁に張られたまゝ、黒く汚れて薄暗い洋燈の光を受けて居る。寢床の上には母親は坐つて居た。病ついでから體は愈瘦せ、顔は暗い一種の影を帯びて、峻しい表情は更に一層際立つて見える。其傍に一人の實直らしい老人が居た。これは老母の義弟であつた。

「嫁取と謂ふものは手數なもんで……」と老人が言ふと、

「本當ですよ。かう幾度も嫁を貰つては、大抵な身代では堪りつこはありはしません」

「今度は好いのが欲しいもんだが……」
「本當ですよ……」

少時黙つて居る。

「此頃は腹の痛みは？」

「少しは好いやうですけど……好いが好いにならるので困ります」

「好い醫者にかゝつて見なすつたら如何です？」

「録もさう言ひますがな。何うせもう世話ばかり焼して居るんですから」

「そんな事は無い。姉さんなどはこれから少しは樂をしなければ……」

坂の上になく騒がしい氣勢がする。それ！と出て見ると、提灯の光が彼方此方と賑かに動いて、と車が五臺其内の一臺は幌が懸けてあつた。

羽織袴の兄弟に譲られて嫁は入口から玄關に上つた。仕切の障子が外されてあるので、二冊綴りの座敷は明かに見渡される。銚之助と銚之助の嫁とお駒の娘と家婢のお鐵とは庭に向いて明いた縁側に並んで立

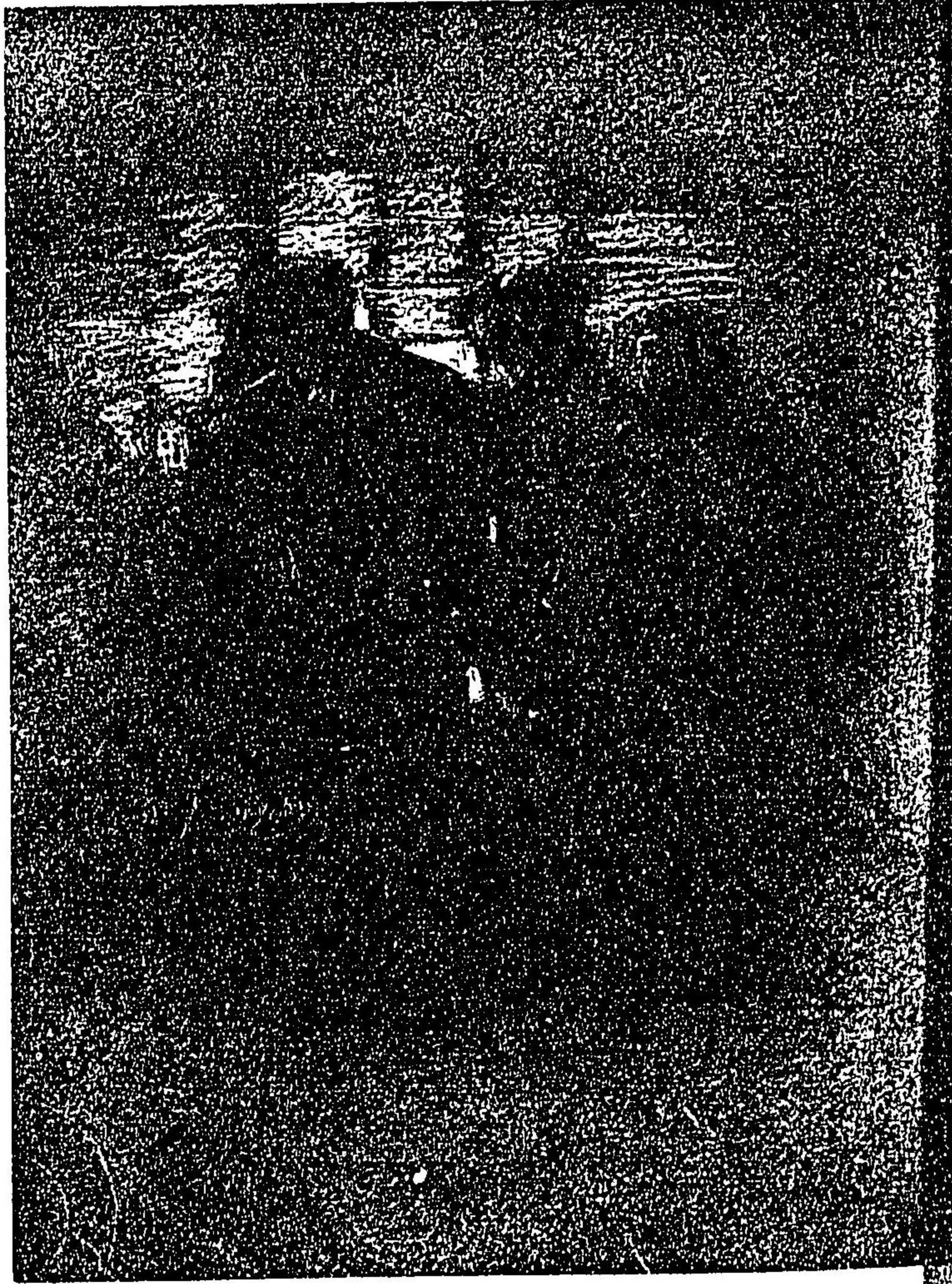
つて居たが、屏風に添つて其の嫁の一行の通る時髪を丸輪に結つた白襟黒紋附の低頭勝の背の高い姿を誰も皆見た。

嫁の一行は座敷に通る。一番上座に嫁が坐つて、續いて先方の兄と弟とが媒約役の隣の主人に挨拶して座に就く。花婿はかういふ儀式には馴れ切つた沈着いた態度で、一通の挨拶が済むと、緩い優しい柔かな語調で、顔には絶えず微笑を含みながら、静かに世の常の會話の緒を開いた。

嫁の眩しさうに低頭して居るのを、媒約役の隣の主人が見て平生遠慮なしに戯談を言合つたことなどを思ひ出して、其生真面目なのが吹出して笑ひたい程可笑しかたが、ふと振り返ると襖の一枚開いた處から、幾箇となく重り合つた顔！

隣の主人は立上つて襖の外に出て、

「障子の穴から見るとは……障子の穴から」と言つて襖を閉切る。



木田五虎の巻

生

家婢のお鐵はそれにも頓着せず閉切つた襖をそつと一分ばかり明けて熱心に嫁の容色と扮装とを自分の身に引較べて見て居た。襖から遣はれて縁側に廻つた群は障子の紙を唾で濡して處々に穴を明けて満し難い物奇の眼を集めるのであつた。

少時して、

「別嬪ねえ」

とお駒の娘が銚之助の嫁に向つて小聲で囁く。

「さうねえ、別嬪さんねえ、あれで二十八ですって、若いのねえ」

「二十八？さう……」と娘はまた覗く。

銚之助の若い妻は嫂になるべき人のことを烏渡念頭に浮べたが續いて五月前に其身もかうして結婚したことを思出した。式は裏の家で舉げたので障子の穴から隙見などはされなかつたが、それが済んで此座敷に伴れられて来て難かしさうな母親に引合された時のさまは歴然と今

も見える。兄さんとも兄妹のかためをした。九歳になる男の兒にも盃を差して、お駒さんが徳利から酒をつぐ眞似をすると、其男の兒はそれを手に取つて、『何だ坊のには一つも入つてやしない！』と言つて一座を笑はせた。あの時お父さんが酔つて大きな聲で高砂を誦つたッけと思ふと、實家の母親が今更のやうに戀しくなる。年はまだやつと十九九齡は重く里心は失せぬのである。

お鐵もいつか其處に来て、隙子の穴から一生懸命に見て居たが、
 『鳥渡々々、お梅さん』

と若い細君の袖を引いて、
 『鳥渡々々御覽なさいよ。今御盃の處ですからさ！』

若い細君も覗く。銚之助も覗く。手傳に來た親類の男も覗いた。――
 丁度今嫁さんが盃を受けた處で色白の顔をばつと上氣させて低頭。勝
 に朱塗の金蒔繪の淺いのを兩手で持添へて靜かに紅なる唇に當てた。

洋燈の光が一塵に輝き渡る。戸外では蛙の聲が一しきり絶えて、また暗しく聞え出す。

再び若い細君の袖を引いたお鐵は小聲で、

「何うでせう。あの旦那様の濟しやうは！平生はあんなに戯談ばかり仰つて居て……そら御覽なさいよ。あれで三度目よ。」

三献の儀式はやがで済む。と媒妁人は少し下り加減になつた袴を引摺つて人々の覗いて居る縁側をあたふたと通つて、離座敷の四疊半の扉を五寸ほど開けて、

「母様の御準備は？」

今しお駒は其病める叔母に急いで衣裳を着せて居た。濃鼠色の三紋附縞子の帯を軽く結んで、白足袋を穿かせやうとして居る處であつた。無造作に束ねた白髪頭、瘦せた皺だらけの蒼白い顔、四邊には薄團やら掻卷やら寝衣、縞絆やらが混雑と散ばつて居る。

老母はお駒に介抱されて座敷に出た。孫の男の兒は肩揚の附いた三紋の黒の羽織に仙臺平の袴を穿いて、大人を小さくしたといふ形で、兩手を膝に置いて、しやんとして其傍に坐つた。

「こまつちやくれた兒だ！」

と嫁は思つた。

嫁は盃の儀式を爲しながらも、新しい夫の美しい鬚と優しい柔かな應對とを嬉しく、前の夫の荒々しいのに比べて、一種暖かい思を胸に漲らせて居たが、母親の蒼く峻しい皺だらけの顔を見ると、兼ねて其難かしいのを聞いて居た故でもあらうか、忽ち後から水を浴せ懸けられたやうな氣がした。「なアに長くつて半年の辛抱ですよ。もう御醫者様も見放して居るんだ相ですから。お桂さんは運が向いて來たんですよ。旦那さんは、それア優しい善い人ですから」と言つた隣の細君の言葉をふと思出した。

母親の眼には、稍々色の褪せた紋附と顔の長い髪の巻れた女の顔とが映つた。何と謂つても元木に勝るうら木無し、英男(孫)の名の母親が一番好かつた。容色も満更ではなかつたし、俊しくもあつたし、女らしくもあつた。何故早く死んだのか。かう思ふと難かしい小言を言つたことが今更のやうに悔まれる。

お駒が先方の人々に老母を引合せる。一通の挨拶はやがて済んで嫁と舅とのかための儀式が行はれる。男の兒も新しい母親の手から盃を受けた。

「私はもう此の通り役に立ちませんから、これから後はこれが……」と孫の頭を撫て、「さぞ世話になることでせう。婆育ちの三百安しで平生あまやかして育て、ありますでな、さぞ骨の折れることでせうけれど、親のない不幸福な子だと思つて、面倒を見て遣つて下さい。英！今日から坊の母様だから、よく言ふことを聞かねばなりませんぞ」

かう言つて一座を見渡して、

「生れ落つるとから世話を焼いたものですから、祖母ちやん祖母ちやんツて私でなけりや夜も目も明けませんでな……。前の嫁など何うしても懐きません。何うかして懐かせたいと色々苦勞もして見ましたけれど、どうも母さんと一言言つたことが無いので御座いますからねえ」

「不束者ですから種々教へて戴きませんでは……」

と先方の長兄が言つた。

「いえ、いえ、もう私が悪い。つい可愛いものですから、自分で世話を爲ますがな、それが矢張りいけないので御座いますよ。今度はお桂さん……確かお桂さんと言はしつたな……。御任しますから、何うか不幸福な兒だと思つて面倒を見て下さい！」

老母は孫の頭を今一度撫で、

「本當に言ふことをよく聞かねばなりませんぞ」

「英さんは本當に祖母様子だからねえ」とお駒は調子を合せた。

こんな事で済んで今度は銚之助と其若い細君とが新しい嫁に引合された。母親は病人だからと言ふので御免を蒙つて其儘四疊半に引込で了ふ。内々の親類ばかりを招いたのであるが、先方の客が長兄と仲兄と弟とで三人主人と主人の叔父と義兄と銚之助と其妻と、それに花嫁と媒妁夫妻を加へて都合十一人八疊の一間には準備した料理がすらりと並んで引物の青い籠が一つ一つ其膳の側に据ゑられた。貧しい家庭儉約に儉約した宴ではあるが兎に角に目出度い結婚の席なので銚子は羽の生えたやうに飛んで二十分も経つと人々の顔は赤くなつて賑かな笑聲が一間に満ち渡つた。お駒の娘とお鐵とが酌に立つたが手が足りぬので主人は自から徳利を取つて酒を勧め快活な調子で面白い洒落を言つて人々を笑はせた。「かうした花嫁もあるものか」と銚之助は不思議に思つた。

議に思つた。

銚之助の結婚した時はかうしたものではなかつた。其時は新しい歡喜と新しい不安とで自から我を堪へ得ぬほど頭腦が動搖した。床の間近く強ひて新妻と並べて坐らせられた時には餘りに晴がましいので何だか其身が侮辱されたやうな氣がした。客が皆な自分等を見にくすくす笑つて居るやうである。あの四疊半の變人もとう／＼こんな平凡な幕を打つたかと誰も言つて居るやうに思はれる。理想がツて、ビュリタシを以て任じて居た處で要するに人間はかうしたものだとな誰かが耳の傍で罵つて居る。媒妁に立つて呉れた二人の親友の手前も何だか耻かしい。平生戀愛の神聖を説き少女の美に憧れて居て、そして内心では烈しい生理的の壓迫を受けて居ただけそれだけこれが一種の降服のやうに思はれて厭な氣がした。母親はそのすぐ側に坐つて居て何か食つたら好いちやないかね後で腹が空くと仕方が無いと小聲で言つて呉れた

がその愛情すら何だか皮肉のやうに感じられた。一座はやがて酒に酔れて赤い顔臥洒落唄——何うしてかういふ悪習慣が日本にはあるのか知らん結婚の席で騒ぐのは結婚そのもの、神聖を潰すものだと苦々しく思つた。それに比べると此の兄の結婚は！かうした結婚をする兄も最初は自分と同じやうな思をして結婚したのかそれとも丸で人間が違ふのか時代が違ふのか銚之助は惑はざるを得なかつた。

銚之助のセンチメンタルな心では人が再婚するなどいふのが既に解らなかつた。世間では妻を亡ふと四十九日も経たぬ中に後を探す五十以上の老人が四十位の中老婦と結婚する。結婚とは隣から猫を貰ふ位にしか思つて居ぬらしい。夫婦の愛情と言ふものはそんなつまらぬものかそんな無意味なものか不剛封の切らぬ女郎の手紙が兄の机の抽斗に一杯埋められてあるのを思ひ出して赤い顔をして平気で洒落を言つて居る兄と古い婚禮衣を着て笑を含んで黙して坐つて居る嫁とをじ

つと見詰めた。

少時してお開きとなつた。先方の客が先づ座を立つ。膳の料理を折詰めに引物の青籠と一緒に風呂敷に包む。戸外に待つて居た車夫は提灯を闇にかいやかして入口の格子の前に寄つた。歸る人を送る聲が一しきり四邊に聞える。俵はがら／＼と坂を上つて提灯の火が賑はしく動く。

一人歸り二人歸り大風の吹いた後のやうに室は静かになる。

銚之助夫婦は四疊半に行つて母親に暇を告げた。

『もう歸るかえ？』

母親は機嫌が好い。

『もう十時過ですから』

『さうなるかねえ早いものだねえ。また明日来てお呉れ』

『今日は餘りお悪くありませんでして？』

と若い妻が訊くと

「あゝ今日は少し好かつた。いつも今日のやうだと好いんだけど……」

「腹も痛まんでしたか」と銚之助が續いて訊く。

「あゝ痛まなかつた。御馳走を澤山頂戴したよ」と笑つて居る。

枕元には御膳が据ゑてあつて、酒が一本ついてある。

「酒を澤山飲んぢやいけませんよ」

「なアに、ほんの少しさ。……お祝だからねえ。……栗のきんとんが旨かつた」

「栗のきんとんなどは餘り好くないでせう」

「何に少しだから」

機嫌の好い時は何處から平生のあの皮肉やら悪罵やらが出るかと思はれる位優しい。

「お梅其處に居たか顔をお見せ」

若い嫁が肥えた莞爾した顔を其枕元に出すと

「火の用心を氣を附けてね若い時といふものはよく油断をするものだから粗忽があつてはならんからよく氣を附けてね」

「え……」とお梅は頭を下げる。

「それではおやすみ」

「お休みなさいまし」

二人は兄弟夫婦に挨拶して、折詰を包んだ風呂敷を妻が持つて戶外へ出た。

五

門前の低地に霧は微白く沈んで空にはをり／＼星が見える。夜風は顔を撫でるやうに軽く吹いて、草木の茂りの蒸がしつとりとした空氣に

そこはかたなく傳はると大地からは物の生育する気が四邊一面に緩く暖かくしめやかに満ち渡つた。

蛙の聲が田から畠から聞えて来る。

前の二階の西洋風の窓には燈光が明るくかゝやいて居た。何處か遠くで琴の音が微かにする。

艶めかしい女の匂がして盛装した衣裳の絹すれが歩く度にやさしい柔かな音を立てた。女の顔は際立つて闇に白い。

銑之助は妻と並んで歩きながらその左の手を力強く握つた。

「お前の手はつめたいねえ」

「貴郎のは何うしてまアこんな暖かなの？」

「熱情があるからさ」

お梅は黙つて唯手を堅く握り返した。莞爾笑つた顔は白く美しくかつた。

「今日は母様は機嫌が好かつたのねえ」

「うむ……」

「母様の機嫌が好いと本當に嬉しいけども……」

「まア好いよ、そんなことは何うでも」

と銑之助は愈々手を堅く握つて其儘並んで歩く。

畑に添つた道穂の長く出た麥に夜露は置いて其向ふに大きい樵の樹の黒くこんもりとした影が見える。銑之助が四疊半の汚い書齋から始

めて世の中に出た家は此畑道の突當りの處にあるので、いつも若い水汲に出る車井戸の前を通り過ると、小さい開きの門があつて庭に

い檜の樹が二本櫓の低い小さい家屋は闇にもそれと明かに見えた

開きの棧を明けて二人は垣の中に入つたが、
「鍵を持つてる？」
「え」と言つてお梅は右の袂を探したが無い。左の袂を見たが矢

水しきんてひひひひひ

い。「何うしたんでせう先程確かに持つて来たんですのに……」と言
けて風呂敷包を夫に持つて貰つて今度は帯の間を探し廻したが、
「ありませんた」

と、やがて鍵を夫に渡した。

夫婦二人暮し目ぼしい道具とても無いので何時もかうして玄關の戸
に鍵を懸けて二人は出るのである。銑之助は鍵を外して戸を明けて其
儘戸内に入つた。茶の間の六疊には三分の釣洋燈がぼんやりと薄く點
いて居たが螺旋を振ると川かなる光は其儘一間に照り渡つた。細君の
栗梅の縮緬の紋附と縮珍の帯と赤い手絡をした丸帯とが此上なく美し
く似合つて何の事は無い結婚常夜姿の姿を見るやうに銑之助は嬉しく思
つた。色の白いのと眉の濃いのが取柄で他は十人並以下の顔立自から
進んで妻にしたには相違ないが時には今少し容色の立勝れたのを欲し
かつたと思ふことも度々であつた。「戀愛が神聖だとか何とか言つたッ

て要するに懐都合で天獄羅を食ふ處を蕎麥で間に合はせたりするやう
なものだ」といふ極端な議論に反對して、「戀愛は神聖である。美醜問
題ではない精神問題である」と論じたこともあつたが——いや今でも
さう思つて居るが矢張美しい妻を持つた人は羨しかつた。

最先に晴衣を着換へやうとする妻を遮つて、

「まア着換へないでさうして居る方が好いよ。もうすぐ寝るんだから」

と銑之助は言つた。

「でもお茶を上るでせう」

「うん飲まして呉れ！」と言つたが、「まア先に一杯水を呉れ。咽喉が
乾いて仕方がない」

「お酒を餘り召上り過ぎるから悪いわ？」

と赤い銑之助の顔を見て若い妻は莞爾する。

「そんなに飲みやしないが……弱いからすぐ酔ッちやつた……」

妻の持つて来たコップの水をぐつと旨さうに一氣に仰つた。お梅は若々しい無邪氣な態度で、長火鉢の前に坐つて、鐵瓶を下して火をかき起した。

「私始め大變別嬪さんだと思つたのよ」

「鳥渡遠見が好いからねえ」

「顔のなだちが好いでせう。それに御つくりしてるもんだから」

「本當に鳥渡奇麗に見えた。年にしちや若い。惜しいことには髪が少し毳れて居るね」

「さう……私知らなかつた……」

鐵瓶が微かな音を立て始めた。

「貴郎、鳥渡お茶の罐を出して下さいな」

茶箆筒一つ無い、食しい新世帯傍の一間の押入の下段に、炭取やら膳やら茶盆やらが一かたまりに混雜と置かれてある。押入は總てがらんと

空いて居た。銚之助はブリキの茶の罐を取つて渡す。

日光土産の茶盆に、此間毘沙門の縁日で一緒に買つて来たお揃ひの布志名焼の湯呑茶碗茶を淹れて、一筒を猫板の上に置いた。

「何か無いか。」

「何んにも……。」

と妻は笑顔をする。

「甘納豆はまだある筈ぢやないか。」

「もうありませんの。」

「食つちやつたのか。」と驚く真似をして、「實に遣り切れんなア。すぐ平らげて了ふんだから。お前に懸つちや堪らん。」

「だつて旨しいんですもの」

「旨いのは定つてるさ」

と其無邪氣な容子が一層可愛しいといふ風で、じつと妻の顔を見る。

ふとある不愉快な思が銑之助の胸を衝いた。其甘納豆を昨日日本橋の榮太樓で買った。魚河岸の賑ひ鐵道馬車渠の原稿を賣る雑誌社は本町にあつた。漸く文壇に出たか出ぬかの青年文學者が雑誌記者から受ける侮辱それが言ひ知れず痛く渠の衿持を傷けた。新刊雑誌を滿載した馬車市下渡しの分を逸早く受取に来る兩車店では男が幾人ともなく地方發送の荷を一生懸命に細で絡げて居る。算盤の音ペンの紙上を走る音靴の音スリッパの音四邊の目覺しい活動は先渠の小さな膽を奪つた。其日は主筆は逢つて呉れたがさも忙がしいといふ風で、一生懸命で書いた短篇小説を詰らなさうにひねくり廻して此間も頂戴してまだ載らずにあるんだからと謂ふのを無理にいろくりに頼んで一枚三十錢の割で六圓六十錢貰つた。甘納豆は其歸途に態々密つて買つて來たのである。銑之助はもう十二三日しか無い今月の月末のことを考へずには居られなかつた。妻には會計のことは一切隠してある。金銭は自から仕末し

て入用の雜費は一々妻に渡すやうにして居る。實家の親達から入智恵をされて収入のことをも知らう知らうとする細君を和めるにも一方ならす心を費した。萬一を慮つた少許の紙幣は半紙に包んで本箱の奥の書籍の頁の間にこつそり入れて置くのである。銑之助は原稿を買つて呉れさうな雑誌社と書店とを考へたが何處も塞つて了つて心當は無かつた。紅葉露伴——分けても近頃買り出した某々新進作家が羨しい。思はず長嘆息を吐くと、

「何うかして？」

「いや」

「だつて何か考へて居るぢやありませんか」

「いや——鳥渡」

「月末の苦勞が胸につかへた。母様のことを心配してるんでせう？」



生

『いや——』

『私出来るだけは看病して上げたいと思つて居ますのよ。私こんなほんやりで氣が利かないけど、母様は本當に御氣の毒ですから』

『ええ』

と夫の顔を見る。

少時して銃之助は思返した。

『もう寢やうか』

『ええ』

で、お梅は立つて座敷に行く。其處には嫁が持つて来た箆笥があつた。寢衣に着更へる様子で、帯を解く音さゝやかな絹すれの音——一枚明けた襖の彼方には、線を描いて射し渡つた狭い燈光を隈取つて、女が丸髷姿を低頭かせながら頻りに晴衣を疊んで居るさまが見える。

曇み終つた晴衣の上の足袋の白いのが際立つて眼に附く。
 やがて箆筒を明けて漱う音が聞える。鏡之助は種々の混乱した思ひ
 を胸に漲らせながら、若い細君が押入から蒲團やら搔卷やらを出して頻
 りに寢床を並べて敷いて居る氣勢を聞いて居た。

『戀愛は本能である』

と非戀愛神聖論者の言つた言葉が第一に胸に浮んだ。

戀愛とは要するに本能か。

頭腦が烈しく動搖した。天上から地の底深く陥るやうな心地がする。
 センチメンタリズム、アイデアリズム、かれは尠くとも美に憧憬した。所
 謂理想をも追究した。美しき面影を頭腦に浮べて、身に汚なき業をする
 時にも、それを本能の盲目的威力に歸することが出来なかつたのである。
 醜い汚れたるこの人間の總ては努力して改善して行つたならば必ず理
 想の境に達することが出来ると信じて——寧ろ反抗的に病的にそれを

信じて四畳半の不潔な一室に汚ない生活を送つて居た。硯には塵が堆く雑誌書籍の四邊に散亂して居る中に髪を長く顔を蒼く自から其身を傷つけて居たさまが歴々と眼に見える。机の上に鏡が置いてあつたが其鏡には鬚の茫々と生えた神経性の顔がよく映つた。洋燈の蓋には戀神聖獅子 Love Amour mein Hebe 苦悶懊惱傑作など、謂ふ字が一面に書いてあつた。そして兄が文箱の底に秘めて置く一冊の書をこつそり出してまたこつそり藏つて置いた。

母親の苦惱といふことが續いて考へられる。兄の實際的生活も思出された。

兄などの生活から判断すると此の人生は平凡主義快樂主義である。快樂を追究しさへすれば好いのである。平凡なる現象を追つてある旨目的な方に屈從して行きさへすれば好いのである。

『それが人生か？』

と續いて思つたが、すぐ考へが變つて、

『母親は——母親は死に瀕して居る！』

死に瀕して居るにも拘らず其子等の結婚この事實が銃之助の頭腦をまた烈しく動搖させた。母親のことが簇々と胸に上つて堪へ難い一種の同情が湧き返る。其身が幼稚い頃母親と一緒に住んだ田舎の士族町のさまから菜の花の咲満ちた知道を母と伴れ立つて町に買物に行つた昔が眼に浮ぶ。母は優しい性質であつた。感情的な處があるので時には嚴しい折檻を受けたこともあつたが要するにそれは父親の無い子供等の教育に必要であつたからである。母は花が好き景色が好き雲の色などに憧れて見とれて縁側に立つて居ることもあつた。銃之助は今も思つて居る、自分にもし文學的の想像の血が流れて居るならばそれは母親から受け継いだ尊い賜である。思出せば弟が士官學校入學試験に合格した年の秋母と三人して日光に遊んであの中禪寺湖畔の紅葉の隱

道の中を楽しく過ぎたことがある。其時の母親の喜ばしさうな顔！それを思つて居ると、今度は晩酌の時の嶮しい悲しい顔と、此頃の病氣に衰へた瘦せた顔とが一つになつて銚之助の眼前を通る。母親を幸福にすることの出来なかつたのは吾等兄弟の罪である！と渠は思つた。

若い妻君は寢床を敷き終つて、寢衣姿の艶めかしい姿で茶の間に來たが、いそぐと長火鉢の前に坐つて、

「もう、貴郎お茶を召上らなくツて？」
「今一杯呉れ」

お梅は急須から湯呑に茶をついで夫に渡した。そして烏渡自分の寢衣姿を自分で見て「こんな旨い格好して？」と莞爾する。

やがてお梅は言葉を續いで、
「母様はもう治らないのでせうか」

「三崎博士もあゝ言ふ位だから、とても難かしいだらう」

「何と言ふんですツて、病氣は？」

「盲腸炎だ相だけれど、醫師の口振では癌が腸に出来たらしい。」

「癌ツて何なの？」

「癌腫ツて、胃癌だの、何だの、よくあるぢやないか。癌に取附かれては切開して治すより外に道は無い。」

「切開！」

とお梅は傷しさに堪ぬといふ顔をする。

「母様杯も若ければ切開するのだけれど、あゝ年を取つちやとても難かしいからねえ」

「左様でしやうね」

と言つて少し考へて、「私の來た頃はまださう大して悪くありませんでしたかねえ。よく酸漿を鳴して、其處の縁側に腰を掛けちや畑の鞆

豆に手を今少し澤山遣らなければいけぬの何のッて世話を焼いて下さ
 ヲたのにねえ』

『まだあの頃は好かつた』

『何うしてあんな病氣に取附かれたんでせう』

銚之助は荒涼たる家庭と母の性格とを思ひ遣つた。人間はこの世の
 生活に伴はなくなれば次に来るのは死だ。母親のは確かに自から呪
 ひ自から傷けた結果の病氣である。昨年十一月兄が頻りに家を空け
 る頃自づから其衝突にも勞れて、『私のやうな我儘者はもう死んで了ふ
 方が好い！』と我とわが身を捨てゝ居た。十二月の始には其病氣が既
 に萌し出した……。

『私此間は困りましたわ』と細君は話を更へた。

『此間ッて？何時？』

『そら、薬瓶を割つたでせう』

とお梅は夫の顔を見る。

『さうさ、あんなことをするから』

『薬取の歸途に紅谷で鹽釜を二本買つて来て呉れッて母様が仰しやつ
 たから彼處に寄つて買つて居ると、つい手が滑つて瓶を落したんでせう。
 彼處は三和土になつて居るもんですからすぐ割れて了つて私何う仕や
 うかと思ひましたのよ』

『また買つて来りや好いのに』

『あの時は何して左様思はなかつたでせう。仕方が無いと思つて歸つ
 て来たんですよ、私餘程何うかして居たのよ、あの時は。歸つて来て、お刷
 さんにこれ／＼と言ふと、よく斷りを言つて置いてやるからッて言ひま
 すからね、其儘母様にも挨拶も爲すに家に歸つて小言を言はれるか言は
 れるかどびく／＼して居たのよ。處へお貞さん(お駒の娘の名)が来て、
 母様がお梅さんに鳥渡入らつしやい！ッて言ふぢやありませんかね』

私ギョツとしてよ。祖母さん怒つて居て？ツて聞くと、いゝえと言ふから、幾許か安心して行つたけれどあの時は何しやうかと思ひましたよ。」
「小言はそんなに言はなかつたッていふぢやないか？」
「えゝゝ、あゝいふ時は挨拶してお詫をして行くもんだと仰つたさき、別に變りはなかつたけれど……」

「注意する方が好いよ」

「えゝゝ……」

不圖時計を見て、

「もう十二時よ、貴方」

「寢やう、寢やう」

と銚之助は立上つた。種々の煩悶苦痛、これを忘れるのは、目前の快樂と睡眠とに限る。ふと兄と新妻とのことが頭腦を掠めて通つた。座敷のさまが續いて眼に映る。

「貴郎、寢衣は其處に出してありますよ」
銚之助が衣服を着替へると、若い妻君は箆筒の側の襖の一枚明いた處で、其のぬぎ捨てた衣裳を丁寧に疊んだ。で、それを箆筒に藏ひ終ると、今度は茶の間の釣洋燈を手にして、勝手から入口裏の雨戸のしまりを残る處なく見て廻つた。

六

それから一時間ほど経つた頃前の雨戸を叩く音が耳に入つて、銚之助は熟睡から覺めた。

「誰だえ？」

「私ですがね……」

家婢のお鐵の聲である。

「何うした？」と銚之助は飛起きた。

「御隠居様がね、御腹が痛い……と仰しやつて」

そゝくさと雨戸を開けると、お鐵は其處に立て居る。

「急に御腹が痛み出しましてね。旦那様も奥様も起きて居らしやいますのよ。旦那様が裏の家にもさう言つて来いと仰やいましたから、大急ぎで飛んで来ましたの」

「餘りいろんなものを食べるから悪いんだ！」と銚之助は言つたが、「誰れか一人家にも来て居て貰い度いものだな、お梅は一人では淋しいから」

「お貞さんにでも来て居て貰ひませう」

若い妻君も起きて来て、寝衣姿のまゝ、一枚明けた雨戸から半身を現した。

「御腹が痛むんですツて？」

「おや——お休みになつたばかりの處を起して御氣の毒でしたねえ……」

……。急に痛み出したんですツて。私ね、成だけ旦那様を起さないやうにと思つてね、お駒様と一緒に介抱したんですけれど、餘程強く御痛なんです。つい御聲が出るもんですから、旦那様も奥様も起きて入らしツて……」

「おう……」

お梅は暗い戸外を見た。

銚之助が行つて見ると、母親は四疊半から寢床を移して、いつもの通り南向に客間の八疊に突伏して寝て居た。腹の痛むのを自づから押へて居るのである。枕元には竹筒臺の置洋燈が薄暗く點いて居て、後には古屏風が半疊まれた儘置かれてある。今宵此座敷で目出度い晴れやかな結婚の宴があつたとは如何にしても思はれぬ程、四邊が暗く侘しかった。お駒は叔母の側で及び腰になつて痛む腹を押へて遣つて居る。

「母様何うしました？」と聲を懸けると病人は顔を此方に向けて

「銑か……痛くつて……あゝ痛い」
と顔を覚める。

「餘り酒を飲んだり何かするから悪いんだ！」と銑之助は強く言つたが、しかも母に對する同情の念は禁め得なかつた。

兄は茶の間の長火鉢の前に坐つて、幾度となく鍋の蓋を取つては、頻りに掩法用の薬蕪の加減を見て居る。新しい嫁は交織の黄縞の袴を着て手を出すにも出し兼ねてそはそはと立つたり居たりして居た。裏の家に行く爲めに熟睡から起されたお駒の娘は眠い目を摩りながら今格子戸を明けて出て行つた。

「痛い、あゝ痛い！」

老母の顔には見る／＼深い苦痛の皺が刻まれる。

「もう、薬蕪が暖まりさうなもんだがなア」と絶望的にいふ。

「薬蕪、薬蕪！ 鏝さん、もう大抵で好いでせう」とお駒が促す。

嫁が長火鉢の前に立つて行く。主人は熱くなつた二枚の薬蕪を長い布片にふう／＼と吹きながら包んで、それ！と言はぬばかりに急いで立つて、お駒に渡すと、お駒はいつもするやうに、老母の胸腹の凝結の出来て居る處にそれを當てた。

苦痛は猶少時續く。

「醫師を呼んで来やうか」

銑之助がかう言ふと、

「何アに、これで落付くだらう……。それにもう一時過だから」主人はかういふ發作にはよく慣れて居る。

「一體酒など上るからいけない」

「でも、お祝だと思つて、ほんの少し上げたんだけれど……別段それが當つたといふ譯でも無からうがねえ」

「もうさつきからですか」

『四十分位前』

『此方に来てから直き？』

『さうさ、それも一時間位経つてからだらうか』

主人は眠さうではあるが、例の落付いた緩かな調子。

疼痛が容易に取れぬので、腹を撫でたり、藪藪を替へたりして、誰も其夜は手を離すことが出来なかつた。四時近く、それでも少しは落附いて、病人も横になつて寝ることの出来る頃には、夏の空の明け易く、黎明の新しい光が既に四邊に充ち渡つて居た。銑之助は曉の新鮮なる空気を吸ふべく、前の雨戸を手づから繰つたが、四疊半の開きが少し明いて居るので、何の氣も無く見ると、暗い洋燈の入室には、蒲團搔卷、嫁の晴衣やら帯やらのぬぎ捨てたのがその儘になつて居た。

原稿に倦んだ進まぬ勝の筆で、銑之助は弘前の弟に遺る長い手紙を書いた。

拜啓仕候昨夜兄上は目出度く結婚致し候嫂になりし人は、既に此春御出の節其話だけは御存じの等の隣の妻君の友達に有之候生れは小生の妻など、同藩の武州行田のものに有之候よし、母などは何方かと申せば、餘り賛成には無之候ひしも、兄上自づから進みて話を定め候次第、小生等は只切に兄上の爲めに將來の幸福を祈るのみに有之候。兄上眞に不運なる兄上！兄上は吉田家の爲め小生等の爲め其功名の念をも學問をも何も彼も捨てられたるに候吉田家の爲め一人取残されし母上の爲めに盡さねばならぬ責任と申せば、兄上のみにあらず、小生も貴下も充分に負はねばならぬことは言ふまでも無し、然るに長男に生れしばかりにて、兄上は小生等の責任をも一人して負はれたる次第、兄上にして常識に富み、世故に長け、犠牲の貴き精神を有せざりしなら

ば小生等はいかに相成り候べき。貴下は無論學資なき爲めに成城學校に學ぶ能はず従つて今日の成功を見る能はざりしなるべく小生は官省の下級官吏などに身を投じて自ら生活の荒波に沈まねばならざりしにて候。小生の眼より見れば兄上は勇氣に乏し自信に乏し奮勵の意志に乏しされど兄上は初めより自信なく勇氣なく意志なき人物にて有之候ひしや。田舎より東京に移りし際貴下は十二小生は十七の富久町の最初の僑居を何れの日か忘れ候はむ。あの頃は嚴格なる兄上にては候はざりしや唐朱八家文の無點の素讀が満足に出來ぬとて半日の跪坐長煙管の雁首にて頭を打たれ候ことは御互に忘るゝ時なかるべくと存候。兄上の優しき胸にも曾ては吉田家の烈しき血流れたるにて候。今こそは其血は乾き其胸は静まりたれど其今日に至りし原因を考へ候へば暗涙の袖を濕すを禁め得ず候。貴下は二十七年以後多くは軍隊生活學校生活を爲したり従つて家庭の苦痛を的

切に身に感せざりしやも知れずされど英男の母親の死亡前後の母上は知れる筈に候。小生はある時は母上の没人情没道義を呪ひたるとすら有之候ひし。されど母上のかく爲りし徑路にもまた涙なきや。田舎を出づる時は録の世話になると申してあれほど樂みにせし身を一朝にしてかくの如き境遇に置く。父に早く別れしこと——これ一家の悲劇の根本と存じ候。母上の病氣は愈々悪しく相成候。此三月貴下の御出の頃は晴れたる日など小生宅まで自から歩み來り候ひしが今は全く床上を離るゝと能はぬ容體と相成候。十日程前三崎博士來診兄が後に聽きたる處にては腸に痛を生じたるらしくとても不治とのことに候。小生等は自己の野心と自己の經營とに逐はれて未だ一片の恩義をも報いざるに母上と別れぬはならぬことを考へ候へば腸九廻の思に堪へず候。公務にてお忙しきは萬々承知なれど其中又一度御出京被下候やう頼入

候。

弘前は如何。未だ参らぬ土地とてよくは解らす候へども、此間御出の時、話にて大抵は想像致し居候。下宿は城址附近の素人屋、貴下の起臥する室は二階の由なれば前に近く山の見ゆること、存候。毎朝士族町を抜けて郊外の聯隊本部へ御出勤若くはしき士官の面影眼に浮び申候。練兵の光景なども思ひ出し候。當地は麥の穂長く蛙の聲前の田に喧しく夜など母の病牀に侍し居候へば、一種状し難き哀愁を覺え申候。

銃之助は此處まで書いて来たが行を更めて、「琴弾く娘の物語も承り度く候」と書添へたが鳥渡考へて墨くろくんと消して了つた。

秀雄が此三月に母親の病氣見舞の爲めに十日ほど来て居た時琴を弾く銃之助の妻の側に坐つて、「嫂さんのは山田流と謂ふのか、弘前では山田流なんか一つも流行りはせんよ。皆な生田流だ」と謂つて自分で

武骨な大きな指に琴爪をはめて覺束ないながらも六段のある部分をシヤンシヤンシヤンと鳴らした。思ひも懸けぬ隠藝「御上手ねえ、御稽古なすつたんでせう」とお梅が謂ふと、青年士官は大得意で「かう見えてもちやんと立派な御師匠様が附いて居るからね」と言つて笑つた。

其立派な御師匠様は下宿して居る士族の家の娘であることがやがて解つた。嫂さんのは餘程違ふといふ生田流の調子は、其の娘の琴の音に聞き覺えたのである。縣廳を青森に取りられて次第に衰へた津輕歴代の城市、商業も工業も活氣を失つて半歳を深雪の中に埋められる淋しい市街も、日清戦役後第八師團の増設と共に新しい活動の氣は到る處に充ち渡つた。劍鞘を鳴して勇ましく街頭を歩み行く青年士官の群は、妙くとも古く衰へた屋敷町の津輕少女の眼を聳だたしむるに充分であつた。

「あだねす、こだねす、どせばよこいす」
など、謂つて、秀雄はよく人々を笑はせた。

「津輕辯大津繪ぶしこ」といふのを歌つて風俗の違つた言葉の解らない北の國の物語を飽かず語つた。下婢のお鐵は面白がつて「梔子」
 「釜子」「べこ」「猫子のこつこ」など、謂ふ言葉を無闇に遣つて腹を抱へて笑ふ。銑之助も調子が可笑しいとて、「笠も冠らねえで、けらこも被ねえで」など、口癖のやうにいふ。あやしげな解らない津輕辯は、秀雄の居る間一家の人々の嬉々たる團樂の種となつた。
 「實に彼方の女は奇麗だ。何うしてあゝ色が白いのかと思ふ位ですよ。何でも上方の種だつてね、彼處等の女は……」
 など、言ふと、歴史通の長兄が、
 「さうとも、あの津輕や秋田は昔から船便の早く開けた處で、酒田から能代、深浦、鯉ヶ澤なんて、上方の船着が非常にあるのだからねえ。日本の歴史では太平洋岸より日本海岸が早く開けた。安部比羅夫が浦慎を伐つた時も、其方側の道路を通つたものだ。だから上方の種が多いさ」

と得意になつて講釋する。
 母親も非常に喜んだ。あけび細工の籠に紅い青い林檎の數汽車で買つて來たといふ南部鐵瓶、青森名産の海丹、甘鹽の鮭など處狭きまで座敷に並んだ。母親は床から起きて來て額に帽子の痕の際立つて白い青年士官と相對した。秀雄は母親の病氣などは餘り苦にならぬといふ風で、元氣よく種々のことを語る。風が強く吹く日で、裏の雨戸は閉切つた儘、室は常に變らず陰氣であつたが、一座は何となく賑かたで樂しかつた。銑之助は其時始めて自分の新妻を引合せた。「あれほど女に憧れた兄貴の嫁は要するにこんな女か」と思はれるやうな氣がした。其頃母親は寝たり起きたりして居た。脇腹の凝結の痛まない日には、よく縁側の日向に出て居たのである。
 銑之助は其時から今日までのことを頭に浮べたが、書き懸けた手紙の筆を取つて、

戀の問題は眞面目ならざるべからずと存じ候。會て貴下は士官學校の入學試験に合格し高崎聯隊に入營せし時その停車場前の旅店の二階にて淺間おろしの吹荒るゝ音を聞つゝ戀のこと物語りしを御記憶のことゝ存候。清き少女を得よ美しき少女を得よ二人の兄よりも比較的世間に成功せし貴下は眞面目なる者にて理想的の少女を得よといひしことを御忘れ下さるまじく候。美しき清き妹を得んことは小生等の願に候。不一。

五月十八日

秀雄様

銚之助

こんなことを書いて馬鹿々々しいと思つてまた消さうとしたが思ひ返して封筒に入れて宛名を書いた。時計がカン／＼と鳴つた。數へると十二時表の家に看護に行つた妻は何うしたかまだ歸つて來ない。五月の日影は庭の綠葉に美しく照つた。

八

細君はやがて看護から歸つて來た。

すぐれない顔を爲て居る。眉のあたりが深い影を帯びて居る。銚之助は一目見て何か事のあつたのを知つた。里心の失せない新妻を庇ふ情と母親の理由のない難かしさを嘆く念とが同時に胸に迫つた。

「母様機嫌が悪るかつた？」

「え」

と悄然する。

「また何か疎忽をしたんぢやないか」

「いゝえ」

「だつて服に悄氣てるぢやないか」

「私氣が利かないんですけれど……」といくらか投げた形で、「私何う

したら好いでせう」

「一體何うしたと言ふんだ？」

「母様は何故あゝ難かしんでせうね。私もう悲しくつて……」
と涙を摩る。

銑之助は若い妻を憐んだ。毎日朝の跡仕舞を済ますと、すぐ母親の看護にと追立てるやうにして出して遣る。若い身空で老母の看病の酷いのはよく察して居る。その小さい胸では、其傍に居るのが怖いのであることも知つて居る。けれど自分の妻だけは母親の氣に入らせ度い。何んな犠牲を取つても母親に喜んで居て貰ひ度い。長兄の妻の絶えざる衝突を日頃淺ましく思つて居る渠は自分の妻をも其巴渦の中に入れてやうとは願はない。まして母親はもう長い命では無い……。

「一體何うしたと謂ふんだ？」

「いゝえ、私ぢやないんですけれどもねえ」とお梅は赤くした眼を摩つ

て、「嫂さんが蕩蕩の持つて来やうが遅いつて、ひどく叱られて……。お鐵さんまで小言を言はれて、一體親や主人を何と思つて居るツて、それは酷い権幕なの。あんなに弱つて居らして何うしてあんな大きな聲が立つかと思ふ位ですよ。私はね、背後で肩を摩つて居ましたけれど……怖くつて、怖くつて……」

「お前も叱られたんだらう」

「いゝえ、私は叱られやしませんけど……昨日来たばかりの嫂様を捉へて、お前は亭主を持つて苦勞したとがあるんだらうが、そんなことで世の中が渡れると思ふかの何のツて、それは聞いて居られないんですもの……。それに、お鐵さんにも随分酷いことを言つてよ。鐵が猫撫聲をするから好いと思つて、勝手に人の息子を騙して来る。お前達は狐だ！狐だ！と大きな聲して仰しやるんですもの」

「困るなア」

『そして終に私に言ふんですのお梅などは年が若いからよく聞いて置
 け彼奴……彼奴と仰しやるんですよ。彼奴等のやうな甲羅の生えた狐
 の真似をしてはいけません。何でも正直に、一度持った亭主は何んなこと
 があつても見捨てる氣になつてはなりません。私なぞを見なさい、若
 い時には難かしい男姑に酷められ、三十八の時に連合に死なれ、それか
 らうして老人の世話も爲たし、子供達も成長くした……と仰しやつて、口
 惜しさうに御泣きなさるんですもの……私も悲くなつて』

『本當に僕等は母のお陰で成長くなつたんだから』
 と銚之助は萬感胸に集まるといふ風で聲を曇らせた。

『すぐ言葉が続いで、『でもお前は母様の氣に入つてゐるんだ。正直に眞
 心でさへあれば、いくら小首を言はれても、ちき機嫌が直るんだから……』
 母様は表面で好いことを言つて、陰で悪いことをするのが一番嫌ひだ。
 兄様の嫁さんなどが此までいつも氣に入らなかつたのは、くどくどと陰

で話などをして居るものだからいけないんだ。兄様も今少し打明けて
 物をするやうだと好いんだけれど……』

『さうね、兄様は優し過ぎるのね』
 『それからすぐ歸つて来たのか』

『お晝飯のことも心配になりますけれど、そんな風なんでせう？ 歸る
 とも言へないで居ますとね、母様がもう晝だ、貴方が待つてらうから
 ツて仰しやつたから歸つて来ましたの……』 其時はもう機嫌が直つて、
 此間の蠶豆が旨かつたから、今少し取つて来てお呉れと仰やつてでした』

で、お梅は午飯を済ましてから庭に行つた。
 庭の一隅に五坪ばかりの畑があつた。昨年移轉した時母親が樂みに
 鋤を買つて来て耕して来たのだ、箱豌豆だの蠶豆などを作つた。

蠶豆は今漸く熟した。
 畑の周囲垣の縁には玉蜀黍がもう二尺位になつて居る。畑にはこれ

も母親がまだ病床に就かぬ前種芋を下して置いた里芋が小さい葉を並べて其隣には馬鈴薯が二畦ばかり出来て繁つて居た。

緑葉の日に照つた間から若い妻君の赤い帯揚が見えた。花鉄の音が静かな空気に絶えず聞える。味噌漉を脇に抱えて畦との間に踏踏んで頻りに手を動して居るさまが机に向つて原稿を書て居る銚之助の眼にをりをり映つた。丸髷と色白の横顔とが亂れてこんがらかつた空想の頭腦の絶間を鮮かに彩る……。

遅咲の葉の細かい躑躅が燃ゆるばかりに庭に咲いて居た。

少時すると妻君は蠶豆の一杯に充ちた味噌漉を抱えて畝の中から出て来たが其儘夫の勉強して居る座敷の前の縁側に腰を懸けて莞爾して、

「もう大抵落しましたねえ、そろく取つても好い位ですよ」

「さうかねえ」
と夫は筆を熱心に運ばせて居る。

「ほら、こんなになつて」

と鞘の少し黒くなり懸つたのを一つ取出して夫に見せる。

「成程もう熟きたね」と銚之助は言つたが思想が今胸に湧き上つたといふ風で、一生懸命に紙の上に筆を走らせるに餘念がない。お梅は夫が相手になつて呉れぬのを不満足と言つたやうな様子で縁側の柱に背懸つて、黙つて蠶豆の鞘をむき始めた。

不意に、

「貴方、ほらこんな大きなのが……」

と、豆の五箇まで鞘に入つて居るのを見せたが、夫が相變らず相手にせぬので、

「貴方、貴方、貴方ッてば！」

「何だ？」

「そんなに一生懸命にならずに少し御休みなさいよ。餘り勉強すると

體にさはりますよ』

『何アに……』

『まア好いちやありませんかねえ、一緒に手傳つて下さつても』
『喧しい女だな』

と言つたが、それでも銚之助は筆を置いて立つて縁側に來た。
細君は笑つて居る。

見る／＼若い青い鞘が一杯に縁側に散らばつた。味噌漉には刺いた
新しい半熟の柔かい豆が段々多くなつて來る。

『もう其中に皆な取りませうねえ』

『まだ惜しい。來月にならなけりや！』

『さうですね。けども新は本當に旨いわねえ、八百屋で買つたのとは丸
で比べ物になりませんねえ』

『それはさうとも』

『私畑大好き。田舎に居て幼稚い時分には、よく母様と枝豆を取りに行
つたの覚えて居ますよ。東京に來てからは畑など見たくも見られな
いでせう。あんな混雜した處ですから』と言つて、調子を變へて、『また
いろんなものを作りませうねえ。今度は茄子が好いのねえ』

『茄子は難かしいから駄目だ』

『さう、難かしいの？』

『母様でも丈夫で居ると、いろ／＼世話して下さるけれど……僕等には、
茄子はととも難かしい』

『さう……それでも玉蜀黍は出來てね？』

『玉蜀黍は今年は食へる。もう直き七月には出來る』

『本當に畑は面白いのねえ。』

鞘はやがて大分剝かれて青い若い蠶豆は味噌漉に半分位になつた
細君は膝を叩いて立上つたが、奥から皿を一枚出して來て、一半をそい

入れて風呂敷で包んで、
「それでは鳥渡母様に上げて参りますよ」

九

其夜兄は弟の家を訪うた。

長火鉢の前に弟に相對して席を取つたので、細君は洋燈の向うに身を小さくして坐つた。

「先程は難有う……母様大變喜んで居ましたよ」と、先づ蠶豆の禮を述べる。

「いゝえ、ほんの少しばかり……」

「新の出たてのは旨いからねえ……それにあれは昨年母様が御自分で稲をお蔭になつたんだから。」

「さうですつてねえ」

「今少し経つて皆な取つたら五六升は出るだらう、さうしたら皆様にも上げますよ」と、銚之助は言つたが妻に向つて、「まだ少しあつたらう？」

「え……」

「兄様に御上げな」

「ほんの少しですよ」

「少しでも好いよ。兄さんは珍らしいもの好きだから」

お梅は立つて勝手に行く。やがて新蠶豆の茹でたのを盆に載せて持つて來た。

「貴方鳥渡側に寄つて下さい」と夫に退いて貰つて、長火鉢の側に来て、お茶を淹れやうとする。

「梅さん、まあ好いよ」

「でも、まあ……召上つて下さい。ほんの少しですけど」

「結構結構」

「結構結構」

と言つて兄は煙草入から煙管を出した。

「母様今日はそんなに痛まなかつたさうですねえ」と銚之助が言ふと

「あゝ……好い鹽梅に……」

「昨夜のやうに痛みつづけに痛まれると困るからねえ」

「左様だよ、本當に……何うかして痛まないやうにして上げ度いと思ふけれど……」

「それから今日は母様は難かしかつたつて」

と銚之助は兄の穏かな顔を見た。

「うむ」

と言つたが煙草を一服吸つて煙管に手を當て、長火鉢の縁で軽く叩いた。

「困るナア、實に」

「本當に困るのさ。」

「昨日結婚しての今日だから嫂様さぞびつくりしたらうと思つて……」

「少しは吃驚してたやうだつたよ。」

と、いつもの快活に似ず、何處となく悄氣て居る。

「何故母様あゝだらうねえ」

兄は黙つて居る。

二人の胸には長い間の家庭の暗闘苦闘のさまが思出された。他人には話して聞かせても想像させることの出来ぬほどの苦痛兄は「母様には何うせ私は氣に入らないのだから銚に後を譲つて私は隠居する！」とよく言つた。ある日の夕暮の衝突「そんなに仰しやるなら私は死ぬ」

と兄は本氣に祖先傳來の短刀を出す。母は母で、「貴様のやうな卑怯者に切腹が出来たら見て居るから爲て見ろ！」と怒鳴る。銚之助は泣いてこれを仲裁した。又英男の生れた時には家は貧苦兄は非職嫂は死亡、母親は泣きながら冬の日の寒空に赤兒の襁褓の洗濯をした。銚之助

と言つて兄は煙草入から煙管を出した。

「母様今日はそんなに痛まなかつたさうですねえ」と銃之助が言ふと、

「あゝ……好い鹽梅に……」

「昨夜のやうに痛みつづけに痛まれると困るからねえ」

「左様だよ、本當に……何うかして痛まないやうにして上げ度いと思ふけれど……」

「それから今日は母様は難かしかつたつて」

と銃之助は兄の穩かな顔を見た。

「うむ」

と言つたが、煙草を一服吸つて煙管に手を當て、長火鉢の縁で軽く叩いた。

「困るナア、實に」

「本當に困るのさ。」

「昨日結婚しての今日だから、嫂様さぞびつくりしたらうと思つて……」
「少しは吃驚してたやうだつたよ。」

と、いつもの快活に似ず、何處となく情氣で居る。

「何故母様あゝだらうねえ」

兄は黙つて居る。

二人の胸には長い間の家庭の暗闘苦闘のさまが思出された。他人には話して聞かせても想像させることの出来ぬほどの苦痛兄は「母様には何うせ私は氣に入らないのだから銃に後を譲つて私は隠居する！」

とよく言つた。ある日の夕暮の衝突、「そんなに仰しやるなら私は死ぬ」

と兄は本氣に祖先傳來の短刀を出す。母は母で、「貴様のやうな卑怯者に切腹が出来るなら見て居るから爲て見ろ！」と怒鳴る。銃之助は泣

いてこれを仲裁した。又、英男の生れた時には家は貧苦、兄は非職、嫂は死亡、母親は泣きながら冬の日の寒空に赤兒の襁褓の洗濯をした。銃之助

の若い妻も主人の新妻も今はこの吉田家の家庭の人となつたが渠等はその骨に徹する苦闘の何者をも知らぬのである。家庭の苦闘ももう終に近い……と二人は思つた。

母を憐むの情は兄の胸にも漲つた。

「母様矢張淋しいんだねえ」

「本當に左様だ」と銚之助はさまざまのことを思ひ出したといふ風で、

「それでもかうやつて吾々が何うやら彼うやらしてゐるのは本當に兄様のお蔭だ」

「いやーまあ皆な人並になつて呉れで私も安心してゐるのさ。秀雄の處から消息は無いか」と主人は態と話題を改める。

「たよりは無いが今日手紙を書いて遣りました」

「さうか」と言つて茶を一杯飲んで、豆を掴んで、「成程これは旨いハ

百屋のとは丸で味が違ふ」

「旨いすねえ」とお梅がいつ。

「初物は贅澤なものだ」と平凡なことを言つて、「何うだねえ御あがり……」

「私澤山食べたんですもの」

「それでもまあ一つ！」と快活に笑ふ。

「茹で方が下手だから不味くつて駄目だ」と銚之助が言ふと、

「好く茹でてるぢやないか……それア若いから始めつからさう旨くは行きやしない。ねえ梅さん。段々それア稽古しなけりや——」

兄は常に若い弟の嫁を慈んで、いろいろのことを教へて遣るやうにして居るのである。

「秀雄に母様の病氣のことも書いて遣つたかい」

とすぐ言葉が続く。

「え、三崎博士の見立のことを知らせて遣りましたよ。そして成べく都合して出て来いと言つて遣りました」

「秀雄もいそがしいからねえ」

「それはさうでせうけれど……」

「相變らず暢氣に暮して居るんだらうな。「あだねす、ごだねすなんて遣つて居るんだよ、屹度」

「屹度左様ねえ。秀雄さん暢氣で好う御座いますねえ」

「軍人は皆なあゝだ、瀟洒して居て好い」

「本當にねえ」

と若い妻は調子を合せる。

「田舎の姉さんも出て来さうなもんだ。兄様さう言つて遣つたんでせう」

「言つて遣つたがね……子供は多いし、貧乏はしてるし……」

「だつて来いと謂ふ方が好いですよ。勝氣だから後で苦情を言はれると悪いですよ。こんな風に悪くなつて居るのに、来いとも言つて呉れないなんて屹度言ふに決まつて居るから……」

「實はお鐵は歸して了はうと思つてるからねえ……お米に少しの間来て手傳つて貰ふと好いんだけど……。お駒さんは左様何時までも居て貰ふ譯には行かんし、お桂も今少し馴れなくつては……」

「左様ですとも……私一つ来るやうに言つて遣りませうか」

「左様だねえ」

と兄は進まぬ風である。

田舎の機屋の神さんで子供が五人、一番末のが漸く今年生れたばかり、銚之助はまだ田舎に居る頃其姉の夫に伴れられて、好奇に足利の市に車を曳いて行つたことを思ひ出した。

「此頃はちつとは好いんだらう」

「いや、あゝいふ風の男だからねえ、損ばかりしてるやうだねえ」

で續いて種々な話が出た。役所への途中の話、役所の話、關係して居る歴史編纂の話、國學の話、漢籍の話、御得意の漢文の批評も出た。渠の書生時代には外國の學問は異端の教へといふやうに青年の群から斥けられて居て、外國語を少しも學ばなかつたので、此の頃新聞でよく使ふモダン(modern)といふ字は何ういふ意味だなどと、銚之助に聞いた。で、お駒の娘が迎へに来るまで種々のことを語りつゝ居たが、何となくはづまぬ調子で何時もの戯談や駄洒落は途に出なかつた。

「兄さん今日は元氣がありませんでしたね」と歸つてからお梅は銚之助に言つた。

十

老母は軽い掻卷を懸けて臥て居た。枕元には藥瓶と覆盆子の皿に載せられたのが置いてあつて、風が通るやうにと前と後の障子が開放されてある。座敷から茶の間は一目嫁と家婢とは勝手元で何か頻りに小聲で語りながら時々低い物音を立て、居た。

六月の晴れがましい日の光物は皆生々として夏の烈しい生育の氣はそれとなく人の頭を壓迫した。病める者のかよわい衰へた體は殊に其強烈なる壓迫に堪へ兼ねたといふ風で、瘦せ果てた蒼白い顔が際立つて滅び行くものゝ哀れさを語つた。

胸腹の痛を覺える時には言ふに言はれぬ倦しさと苦しさを感ずる。

氣が滅入つて了つて猶且つ頭腦が苛々する。何うしたら好いだらうといふやうな絶望的の憂苦が漲つて思はず一種の戰慄が出る。

今は沈着して居る。腹の痛も無い。別にこれと謂つて悪い處は無いやうな氣がするが、それでも何處かに恐ろしい力が潜んで居て、それが時

機を待つて身を壓して来るやうに感じられる。鈍い佻しい理由のない不安がをりく来る。

何うしてこんな病氣に罹つたかと思ふ。と其の最初の時の状態がすぐ思出される。昨年の春の初脇腹に傷が出来た。切開しなればならぬかと思つて妙なからず心配したが懸りつけの醫師の盡力で四月頃にはすつかり治つた。あの頃から此病氣は萌して居たのだ。あの時好い醫師に見て貰へば好かつた。切開してすつかり悪い膿を出して了へば好かつた。

銑之助が別居した頃家具を買ひに神樂坂によく一緒に出懸けた。長火鉢だの米櫃だのお鉢だの陶器だのいろくなものを買つた。道具屋を軒別に冷かして見て歩いたツケ。其頃矢來の交番から郵便局までの間の路を歩くのが不思議に思ふほど大儀であつた。何時もそんなことは無かつたのに……。

あの頃から此病氣は萌して居たのだと再び思つた。

銑の嫁銑之助の嫁が飛んで四五十年前も前の昔に返る。御國替以前のことが眼に浮ぶ。出羽山形から三里高棚の御陣屋に成長したことが分明と……。石の多い水の少い立谷川といふ川があつた。その立谷川からすぐ考が變つて銑の姉(それば死んだ)の生れたばかりの時夫が勤番の朝の歸途に、其立谷川で梟を捕へて來たことを思出した。其川原で梟が鳥につつかれていぢめられて居るのを大小二本差した夫が拔足差足近寄つて行く光景が何だか書でも見るやうに其身とは何の關係も無いやうに眼に見える。家に持つて來て座敷の床の間に置いた。梟はじつとして居る。置物のやうだなどと言つたことを覚えて居る。近所から人が大勢見に來た。そして夜になつてから可哀相だと言ふので裏の窓から逃がして遣るとばたくと大きな羽搏をして栗の樹の繁みに飛んで行つて了つた。

人はいふに、一生の走馬燈を見る人。

生

近いことゝ遠いことゝが丁度遠近の無い銅版畫を見るやうに一緒に
なつて集つて来る。いろく顔が眼前を走馬燈の様に過ぎて行く。
其身は今年六十一といふのを忘れはせぬが又一方では若い若い身
のやうな氣がする。庭の檜の葉が微かに風に動いて、ちらちらと日光が
差込む。前の井戸で水を汲む音がする。家婢のお鐵が門前で何か言つ
て居る聲が聞える。例の落合の八百屋の爺の聲だ。

「御隠居様は如何です？」

といふ見舞の言葉がする。

お鐵が何か其返事を爲たやうであるが聞取れない。床の間の置物の
陶製唐獅子が眼に附く。嫁の箆の上の鏡臺の鏡に自分の寝て居る瘦
せた脚が映つて居る。例の不安と共にある力が追つて來たと思ふと今
迄胸に描いた總ての追憶總ての現象が幻のやうに消えて了つて、チクチ
クと痛い腹の現實に歸着する。

生

老母は氣丈な性質である。夫に死なれてから二十年來人に指をさ
れたことはない。物の解りの早い正直な感情的な血の燃えた烈しい處
がある。愛憎の念が如何にも強い。氣に入つたものは馬鹿に氣に入る
が氣に入らぬものはその弱點ばかりが見える。ある目的を抱いて來る
ものを殊に甚しく憎んだ。

「私も御寺參でも始めやうかな」など言ふ事がをりくある。かう
いふ時は屹度其の家庭の衝突に苦み抜いた後だ。けれどそれは出來な
かつた。珠數を繰つたり御寺參をしたり孫のお傳をしたりする普通の
人の好いお婆様を見ると何うしてあゝ閑暇なのだらうと思ふほど其心
は現實に觸れて居た。不安の念などを起さずに嫁や息子のするまゝに
平氣で日向ぼつこりでも仕て居れば好いのであるが何うもさうしては
居られない。眼がある物が見える、するとすぐ其の鋭敏な頭腦が動搖し
て不安不平の念が起つた。

これが其性質ではあるが境遇もさうするのに興つて力があつたことは言ふまでもない。女子供だと思つて人に馬鹿にされまいといふ長い間の不安と努力とは、其神經を常に興奮させたのである。それに老母は封建時代の女子の絶対の服従といふ境遇に其屈しない烈しい性質を置いて來たのだ。自己の絶対の服従といふことは、其身が主權者となつた場合には多くは自己の忍耐したやうな絶対の服従を他から要求するものである。封建時代ならそれでも好いが今は人も變り思想も變り習慣も變つた。烈しい衝突と不平と不安と荒涼たる生活とは、竟に竟に免れることが出来なかつたのである。

三男の秀雄のことを思つた。あれが人並に立派に成功したのは嬉しい。お上の御用で弘前などいふ遠い所に行つて了つたのはいかにも残念だが、これも仕方が無い。断念めて居る。此間來た時、「もう母様はお前に逢へるか何うだか解らないから、丈夫で」と言つたら、「うん……」

と平氣で言つて涙も滴さずに車に乗つた。あの男らしい處が可愛い。何も彼もつけくと言つて呉れる處が嬉しい。鎌などは丸で違ふ。かう思ふと其の軍服を着て劔を下げた額の白い無邪氣な顔が歴然と眼に見える。今一度逢ひ度いものだ。今一度たつた一度で好いから逢ひ度い。

鏡之助に手紙を書いて出して貰はう……と思ふ。腹が矢張痛む。蒟蒻を當てやうかと思つたが、彼奴等の世話になるのも面倒だと思ひ留る。腹を強く蒲團で押すやうにする。

眼では見て居らぬが、嫁が前の庭を通つて、四疊半の離座敷の垣の處に行くのがよく解つた。嫁は其處で垣越しに隣の細君と長い饒舌を續けるのが常である。

老母は不愉快でならぬ。興奮した神經が手傳つて、其饒舌が此處まで分明と聞えて來るやうに思はれる。前の嫁も井戸端でよく油を賣つて

居た。何うして今の若い者はあつたらう？ そんな閑暇があつたら病
 人の世話をしたら好きうなものだ。でなくとも腰巻の汚ないのでも
 洗濯したら好いだらう。此間なぞ現に汚い物が其處等に散ばつて居た。
 女がさういふ不始末をするのは此上もない耻辱である。ふと前の嫁が
 朝飯の焦げたのを食ふのが厭さに襦袢布に包んで押入の奥に隠して置
 いたことを思ひ出して厭な厭な氣になる。
 家庭の衝突は三度の食事にも痛く辛かつた。誰も焦げた飯や冷飯を
 食ふのは厭だ。けれど老母は四十年來それを食つて來た。嫁も當然食
 ふべきものと思つて居る。であるのに優しい主人は氣の毒に思つてそ
 れを一二杯手傳つて遣る。主人が食ふのを弟の分際で食はぬ譯に行か
 ぬ。二人の弟が手傳ふと嫁のは残り少なくなつて餘は暖い飯を盛る。と
 弟も不平老母も不平、「一體嫁が甘やかすから悪い」といふ痛い非難が
 起る。

英男が四歳位の時焦飯が非常に好きであつた。ある時銚之助は戯談
 に「亡くなつた嫂様は焦飯ばかり食はせられたから英男も好きなんだ！」
 と言つた。と老母はえらく怒つて馬鹿を言ふナと叱つた。――腹はチ
 ク／＼と針で刺すやうに痛い。
 神経は益々昂まる。頭腦が何のことなしに動搖する。いつもの指を
 押へに押へて居るが容易にそれが押へ切れない。追憶苦痛責絶望――
 「私のやうな業法人は早く死ね死ね！」と思つたが一方では死ぬのが
 何よりも恐しく厭であつた。
 堪らなくなつて、
 「お鐵！ お鐵？」
 と叫喚くやうに呼んだ。
 返事が無いので、

「お鐵！」

お鐵は飛んで来た。

老母は顔をしかめて追つて来る腹の痛いのを押へて居る。

「お痛みですか」

「痛いから菫蕪をつけて呉れ。それからお桂があの垣の處で饒舌をして居るから呼んで呉れ」

立つて行つたが、「奥さん奥さん」と呼ぶとやがて返事がして嫁は其處から姿を顯した。

丸溜の壞れ懸けた頭で交纏の縞の單衣に黒縹子と縹縹珍との腹合の帯を緊めて甲斐甲斐しさに襷を懸けて居る。如才の無い態度で、

「おや母さん御腹が痛いのですか。ちつとも存じませんでお饒舌をして……。お隣の奥さんが捉へて睡さないもんですから」と言懸けて茶の間に行く。

「何方がつかまへて放さないんだか解るもんか」と腹を押へながら老

母は嫁の後姿をざろりと見て言つた。

一時間ほど痛んだがそれでも好い鹽梅にやがて静まつた。菫蕪も一度着けたばかりで済んだ。其處に藥取に行つた銚之助の妻が歸つて来た。

風呂敷から梨子を三箇出して坐つた。

老母は銚之助の妻の若々しい扮装と生々した若い血色とを好ましさうに嬉しさうに見て居た。秀雄の嫁が出来てかうして来て居て呉れたならさぞ嬉しからうと思ふ。またしても青年士官のことが胸に上る。

十一

御維新の時館林藩は烈しく動搖した。御親類の宇都宮の殿様は賊に襲はれて御城を取られて大小も百姓家に御預けになつて御微服で早川

田口から逃げて御出になる。忍藩も形勢不穩で何か賊に味方をしたといふ評判が専である。藩はもうすつかり四方から圍まれて何時戦争が始まるか知れぬ。風聲鶴唳人々は皆な荷擔して立つた。力になる男達は曩に既に多く出兵して丁つて年寄まで驅催されて御番所々々を固めて出て居るので何處の家にも女子供ばかり頼りになるものとは無い。丁度七月の暑い頃であつた。それ！と言つたら逃げ仕度を爲て置かねばならぬので近所の女房連は門口に出ては聲を密めて落延びる先を彼れの是れのと語り合つた。第一に蒲團は持つて行かなければならぬ。蚊帳を忘れてはならぬ。先祖の佛様だけは何を攜いても携へて行ねばならぬ。あれも持つて行き度い。是も持つて行き度い。考へるとあの時は實に心細かつた。丁度あの時お米が腹に居た。不安心で不安心で立つたり居たり今にも鐵砲の音が聞えるかと氣が氣でなかつた。其翌日官軍が勢揃をして入つて來たのを見た時は丸で生き返つた。

やうに人々は喜んだのである。陣笠に陣羽織にダンプクロ槍が美しく日に光る。「宮さん宮さん御馬の前にひらくするのは何ぢやいなあれは朝敵……」といふトコトンヤレナ節が城下に充渡つた。夜など洗湯に行つて歸つて來ると其節を唄ふ聲が路の角や裏の島の向うに聞える。笠がスイ〜と闇を縫て飛んで行く。

あの時鐘は三歳だつた。いつも午後に晝寝をする。其時分よく調練の太鼓の音が鳴響く。ドンドコドンドコドンドン——それが如何にも喧しいので折角寝たのを眼を覺さなければ好いと何の位苦勞にしたか知れなかつた。

——考がすぐ變る。明治十年の二月夫が警視廳から歸つて來る。愈愈戦争に出ることを決めたといふ。「貴郎田舎の老人や子供を置いて、ものことがあつたら何うするんです？」と居直つて眞面目に聞くと、「其時は其時さなるやうにするさ」と平氣な調子で、「御維新の時死ぬ

等なのを十年生延びた死んでも残り惜しいことは少しも無い」と言ふ。其頃夫は東京に出て下谷の根岸の警察に勤めて居た。老母に取つては其時が一番自由で楽しかつたのである。中根岸の榎の樹のある附近に借家をして住んで居た。近所に八百屋の市があつて夜はカンテラの黒い煤煙が狭い通に満ちて相場を羅る聲が喧しく聞える。大根の白漬菜の青荷車が混雑と四邊に置かれてあつた。坂本のある横町の角には夕海岸の魚を鬻ぐ露店が出て居る。鯛が今日は廉かつたと夫が歸り懸けに見て来ていふ。すぐ出懸けて行つて買つて来て夫の晩酌の料にした。戦争に行く前年十二月に秀雄は産れたのである。銚子は十三歳お米は十一歳銚之助は六歳戦争に行つた跡は小さい家を借りて御院殿の坂の下に住んだ。秀雄が弱いので子供等を前の家に頼んで結付に負つてよく浅草の門跡の裏の小兒科の醫者に通つた。阪本の通に繪草紙屋がある。戦争の錦繪が多く出て居る。それを行きに歸りに見て戦地の光景を胸

に描く。三月の末に戦地から消息があつて「柳の糸も長く菜の花も咲きて長閑なる氣候に相成候」と書いてあつたが四月の中旬の御船の戦に夫は戦死して了つたのである。五月になつて一時絶えた郵便が開け何處の家にも消息はあつたが吉田の家には無い。郵便脚夫の通るの見る度待渡つたが遂に來ない。一日總領の録を牛込の同藩のある家に様子を聞きに遣つた。夕暮を待兼ねて御院殿の坂の上を見て居ると其總領の少年は其家から貰つた大きな山吹の花の枝を擔いで其姿を薄暮の空氣に浮出すやうにして歸つて來た。山吹の花を床の間の花瓶に挿した。月の末には戦死の報知が警察から來たのである。國から舅が出て來て七月には一家を纏めて田舎に歸る。利根川の河舟薦包の幾箇となく重つた後に母親は其總領の少年が船頭に交つて淺瀬で無邪氣に泳いで居るのを見て居た。夏の暑い日が閃々と水に照り渡る……。

鏡が一人前になつて東京に上つた時の利根川が續いて老母の眼に映つた。河舟船頭苦岸の竹藪柳それが總て其一生と密接な關係を有つて居る。それから田舎家——狭い古い藁葺の田舎家が額縁にでも入つた畫のやうにくつきりに見える。壁に張られたまゝ黒く煤けた西南戦争の錦繪野津大佐が劍を振り上げて軍旗を奪ひ返した。其傍に東京名所の不忍池の繪が一枚張られてあつて本郷臺の大學校の時計臺が高く富士と共に聳えて居た。

不圖嫁の死んだ顔が眼前にちらつく。子痢といふ病氣は妊娠中精神の過勞から來ると或人が語つた。此身が酷め殺したやうなものだ。かう思ふと神經がブリ／＼する。もう呼吸を引取つたと謂ふのがら座敷に行つて見る。嫁は蒼白い顔をして死んで居た。鏡は泣いて居る。因果な赤兒は傍に放り出した儘誰も構手が無い。其死んだ蒼白い嫁の顔！今思つても總身が震へる。

睦しい若い夫婦の愛情二十何年來自分の身にも増して愛育した息子を其儘奪ひ去られるやうな氣がして一方では限りない孤獨を感ずると共に一方では理由の無い嫉妬と忿怒とを感じた。襖を隔てゝの夜のさざめ言老母は嫁を仇敵の如く憎んだ。

誰に成長くして貰つた。此母親の爲めに人並に育て上げられたのではないか。此の母親が居なければあの時再縁して了へば……再縁した例はいくらもある……お前達は何なつて居るか解らんのだ。それなのに嫁の愛に溺れて母親を粗末にするとは男にも似合ぬ意氣地なし何の爲めに學問をした。「孔子様の教にはさう書いてあるか」とよく罵倒した。嫁は容色は左程よくはなかつたが小心な眞面目な女であつた。暖かい家庭の懐からこの嵐のやうな姑の悪い機嫌絶えず其衝突に胸を痛めて常に病人のやうに蒼い顔をして居た。

蒼い顔が思出すまいとしてもまた思ひ出される。葬式の時の混雑實

家の父親の悲憤——もうもう思出すまいと自から眼を閉ぐ。その赤兒を老母が育てた。機械で腹から出したので、其痕の穴が後頭部に出來て、腹が絶えず出る。それを銃之助は熱心に細帯して遣つた。銃之助の小心な文學好きの胸には、此時の光景は深く淺ましく刻まれて、殆ど家にあるに堪へなかつた位である。里子に遣る好い口が見付からぬので、久しい間主人はそれを抱いて寝た。夜深に寝こじれて寝つかぬのを、ほい／＼と主人は縁側を揺つて歩いた。母親はそれを世話して遣らうと思はぬではなかつたが、感情が衝突して居るので、腹では不人情と思ひながらも、それを平氣で見居たのである。

青山の嫁の墓が今度は眼につく。椿楓樹風雨に曝された墓石。嫁の道具を歸す歸さぬで、一悶着があつて、三百代言風の男が實家から來て、五時間荒々しい聲で饒舌つた。主人の生優しい聲が齒痒くつて齒痒くつて、次の間に聞いて居られなくなつて、飛出して行かうかと、母親は幾度も

思つた。で交渉の結果縮緬の婚禮衣を賣つて、其の青山の墓石が建てられたのだ。

頭腦が眩惑するので、われ知らず突伏さうとすると、「また御痛みですか」といふ聲がする。氣が附いて見ると、銃之助の嫁が肩を摩つて居た。少時すると、門前に俵の音がして、醫師が來る。

此附近がまだ田舎の頃から居る醫師で、背の低い、元氣な親切な五十格好の莞爾した顔氣輕に座敷に通つて、病人の起きやうとするのを手を制止して止めて、先づ胸をひろげて腹部を撫で、見る。凝結のある邊を堅く押へて、

『痛むか』と訊く。

老母は頭を軽く振つた。

『何時も痛むのは此處だナ』と言つて、少し考へるやうな態度をして、『ふん』と獨で點頭いて、袍から聴診器を出して、胸の其處此處と當て、見た。

最後に脇腹の凝結の處を長く耳を澄して聞いて居たが、『よろしい』

と言つてはだけた病人の胸を合せて聴診器を藏ひにかゝる。お鐵が眞鍮の金盥に水を持つて來て新しい手拭を出す。手を拭きながら、

『大さによろしい』

『氣分の方は少しは好う御座いますが時々痛むのには困り切ります』

『さう急には治らんナア』

と醫師は笑つて見せる。

『何うか腹の痛みだけでも除つて頂きますれば——』

『よろしい、屹度私が治して上げる』

いかにも軽い病氣と謂つたやうな風である。不圖其處にお柱の坐つて居るのに眼をつけて、

『これが主人の嫁さんかな』

嫁は慌て、辭儀をする。

老母は、『此間貰ひまして……不束者ですが……何分宜しく』

『私はまた此間まで此方が嫁さんかと思つて居ました』

と丸稽姿のお鐵の方を振向く。お鐵は顔を赤くして茶の間に行つて了つた。

『……いゝえ、あれは召使で……』といふ老母の聲がする。

『此方のは弟御の嫁さんでしたな』と醫師は猶平氣で、『お婆様かう好い嫁さんを澤山持つては本當に幸福だ。もう樂が出来る』

『いゝえ、もう……』

猶話を續けるかと思つたら、ついだ茶をも飲まずに其儘ふいと立つて歸つて了ふ。傳ががらくと坂を上る。

丁度其頃此家の主人は神樂坂の通を歩いて居た。紺羅紗の薄い夏の

背廣の三四年も着古したのを着て、バナマ帽の黄くなつたのを冠つて、紫の唐縮緬の風呂敷包を小脇に抱えて居る。風呂敷包の中には今夜校合しやうと思ふ歴史編纂の書籍が入れられてあつた。俄に暑くなつた路に、シャツもズボン下もびつしより汗になつて歩を運ぶのも大儀らしく汚れた手巾を隠袋から出しては帽子を取つてをりく額の汗を拭いた。街には車が織やうに通つて書生が行く女學生が行く商人が行く番臺を擦つた魚賣が行く。氷屋の硝子の暖簾がきら／＼と日に光る。角の交番には白い服を着た巡査が疲れ切つたといふ風をして立つて居た。渠の精神も全く働か果て倦み果てゝ居た。役所の仕事も囁托された歴史編纂も厭で厭で仕方が無い。新しく貰つた細君に對しても別に楽しいといふ感も起らない。馴染の女を鳥渡念頭に浮べて見ても、それも何の反映をも起さず消えて了ふ。不圖懐の財布に金が五十銭あることを思出した。丁度其前が青木屋の舗薬物や魚肉類の舗詰が山の

やうに積まれてあるのが眼に入つたので、母親を喜ばせやうと思つて、づかくと入つて行つて杏の舗詰を一箇買った。

十二

「お桂さん、たんと御馳走して下さいませよ」と隣りの細君が冷かすと、

「何んぢやろ、まア……」

と手で打つ真似をしたお桂の言葉には行田訛が残つて居た。

「たつて餘り幕無しぢやありませんか。……黙つて聞いてると思つて

……」

「何が幕無しぢやろ……ちつとも可笑しいことは無いぢやないかね。」

「だつて随分ですからねえ」

「何が随分なの？」

と笑ひながらお桂は態と膝を進める。

「お祖母様が妬くの……半襟を買つて貰つたのッて……私や眞面目に聞いて居れば、好い氣になつて、たんとお惚けなさいよ」

「今に新甘薯が出来たら、筋の無い所を澤山吞らうかねえ」と相好を崩して笑ふ。

「人を馬鹿にして……」

と隣の細君も打つ眞似をする。

「だッて左様ぢやないかね」

「ちつとも左様なことはありやしない。私甘薯大嫌ひ、」

「さう甘薯大嫌ひ？それぢやお汁粉でも……」

「お汁粉も大嫌ひ」
ふとお桂は思付いて、「お汁粉つて言へば昨日それやひどく叱られたんですよ……」

「誰に……」

「母様に」

「何うして？」

と稍眞面目になる。

「昨日の朝お汁粉が喰へ度い千餠でない、小豆から拵へたのが食べ度いと言ふんでせう。丁度お梅さんも来るから、午時分までに拵へて御馳走して遣れと言ふから、私一生懸命で、この暑いのに火を燃して、餅を三軒ほど訊て廻つて、漸と買つて来て清しの方が好いだらうと思つて、あくぬきをして拵へたのさ……すると大小言さねえ」

「氣に入らなかつたのかえ？」

「まア、お聞きかうなんだよ。私や盲く出来た積で母氣の分だけ小さいお鍋に入れて持つて行つて置いて来るとね、始めは喜んで莞爾して出来たかえッて言つて、起返つたのさ。私は用があるから勝手に来て居ると、お桂！お桂！と尖聲で呼ぶぢやがね」

「ふひ……」

「吃驚して行つて見ると、苦虫を噛つふしたやうな顔をして……お桂！これは何だ？これでも汁粉かと言つて、杓子をお盆の上に」と面白手眞似をして見せて、「かういふ風に投り出すぢやないかね。」

すぐ言葉を續いで、

「そして、お梅さんの居る前で、こんな鏡汁のやうな汁粉は食へるもんか、汁粉の拵へやうも知りやがらないッてね、それア不機嫌たら無いんぢやがね……ごてんくと田舎風に拵へりや好かつたのに、氣が利き過ぎて御氣に召さなかつたのさ……本當に難しい婆様——」

「婆様なんて、そんな酷いことを言ふもんぢやありませんよ」

「はい、はい」と態とおどけた調子で、「御免なさいよ。悪う御座いました。これからは謹みますよ……」

「お桂さんはすぐあゝだから厭さ。今少し眞面目になさいよ」

「はい、はい」と笑つて居る。すぐ、

「でもね、家では旨く出来たつて食つて呉れましたよ」

「結構ですよ」

と隣の細君は冷かした。

少時話は途絶えたが、やがて、

「お鐵さんはまだ歸らないの？」

「歸す、歸すツて言つてるんだがね、何時歸るんぢやらうねえ。始の中は私も不思議に思つたんだがね。あの顔に白粉をべたく傳けて、いやにぢやら／＼して厭な女ッたらありあしないんだものねえ。そして時々書齋に入つて、夫と何かこそ／＼話してるぢやないかね。始めは私でつさり……それだと思つて、お菊さん(隣の細君の名)もお菊さんだ、そんな處に世話して呉れるとは何うしたんぢやろと思つたくらゐ……」

「まさか鐵さんが……」

と隣の細君は笑つた。

「え、く、それはそんなことは無いのはすぐ知れたけどもねえ……」

「寝物語にたんと油を取つたといふ譯？」

「え、く、どうせ左様さねえ。だけど本當に厭な人つたら無い」

「あの人も祖母様にはあれで随分睨まれたものよ」

「さうでせうねえ。それでもあゝして居るんだから、餘程旦那様が見込まれたつて言ふやうな譯ですな、屹度……」

「それは左様よ」

「其中田舎の義妹が来るんでせうよ……それ迄置くかも知れないと夫で言ふことは言つてましたかねえ」

「さうですか」

また話が變る。

「銚之助さん、よく見舞に来て？」

「え、く、く」

「随分難かしい人でせう」

「え、く、く、もう私閉口。何うしてあゝ夫などと氣分が違ふんぢやらう。難しいッて、それア一通ぢやないかねえ」

「それアあの祖母様さへ銚の變人には困るッと言つてたんですもの……。それは變り者よ。この隣の四疊半に居た頃などよく知つて居るけど……。一日蒼い顔をして黙つて机に向つて居るんですからねえ。そして時々大きな聲をして新體詩とか言ふものを歌ふんでせう。それア餘程變でしたよ。それから友達が来て、よく議論をするのよ。丸で喧嘩かしらと思ふ位……」

「今でも左様なんだッて……それに、お梅さんは望んで貰つたんだッてねえ？」

「え、左様よ」と笑ふ。

「あの變人がお梅さんのことだと、大變なんだから可笑くなつて了ふぢやがねえ。お梅さんが母様に小言を言はれやしないかと、そればかり苦にして居るんだよ……。それにお梅さん、まだほんに子供ねえ」

「何處か娘々してる子ねえ」

「準備が立派だとか何とか言ふから、何んな衣裳持かと思つて、此間見せて貰つたら……。紋附が二重簞笥が一棹初めの嫁さんでは立派でも何でも無いぢやがねえ」

「でも、何から何まで揃つて居たつて、祖母様御自慢でしたよ。」

「あんな鏡臺や下駄箱ならいくらでも揃へられるがねえ。もう長持など鏡が外れて居るぢやないかねえ」

裁縫友達は藏すところなくく／＼のことを語り合つた。菓子器の餅菓子も皆無になつて茶は出流れて了つた。をり／＼お桂の頓狂な笑聲が四邊に聞える。

「只、本當に困るのねえ」と少時してからお桂は稍眞面目な調子で、「話をしてくれないのが一番困るんですよ、書齋に入つて何か言つてると、すぐ喧ましいんぢやがねえ。本當に遣り切れないねえ。」

「睦しい間でも、親には疎々しく見せるつて言ふ話があるぢやありませんか」と細君が少し笑ひ懸けながら言ふと、

「すぐあゝ取るんだよ、まア……。」と少し睨む眞似をして、「だから厭らしい。さういふ積ぢやないんだつてはねえ、本當に。」

「それは左様でせうよ……。」と細君も調子を變へて、「まア辛抱するんですよ。喧しいたつてはいく／＼言つてさへすりや好いんですからねえ……。もうあゝなつて居るんですよ、何せ長いことはありはしない。

此頃だつてよくは無いでせう？」

「えゝ／＼、段々悪くなるばかり……。」

「辛抱なさいよねえ」と言つた細君の聲は眞面目であつた。

お鐵は六月の下旬梅雨の蕭々と降頻る日に其家を去る準備をして居た。臺灣に赴任する家族について行かうか、某病院の看護婦にならうか、此二つがかれの將來の運命であつた。昨年の暮近くある希望を抱いて此家に来てから随分種々なことがあつた。其折々につけて怒りもし泣きもし嘆きもした。難かしい老母を呪つたことも一度や二度では無い。けれど半年以上家族として働いた馴染は、今別れに臨んで、一種の哀情を催さしめるに充分であつた。

嫁さんの馴れるまでと言つて留つて居たが、もう嫁さんも看護の仕方を覺えた。田舎の妹の來る迄と旦那様は仰しやるが、さう何時までも便として居られない。其身の不幸福の始末もつけなければならぬ。天にも地にも頼るものとは無い自分の孤獨を思つてお鐵は袖を濡し

嫁が出て行けがしに取扱ふのが憎くツて仕方が無かつた。反動として、この嫁の世話になる垂死の老母が可哀相になつて同情の念が湧いた。お鐵は玄關の三疊を一杯にして其荷物を片附けて居る。小さい鏡臺を疊んで行李の中に入れてたり、二三冊の書籍を其隅に押込んだり、蒲團や夜着を皆布の大風呂敷に包んだりして居た。昨日結つた丸盥に伊勢崎銘仙の單衣、黒縹子の帯を緊めて烏渡小奇麗な身格好。がら／＼と音して俵が來た。

其儘座敷に行つて、

「夫では御隠居様永々御世話になりました。随分御機嫌よろしう……此大私が御伺ひ致す時分には丈夫になつて……」と言懸けた聲は疊つた。

「あゝもう行くかえ」と老母は起直つて、

「いろ／＼我儘を言つて世話になつたね。もつと御禮も爲なければならぬ。いんだだけとかういふ有様だから……」と少し途絶えて、「昨日登

灣に行くとお言ひだけれど、そんな遠い處には行かないでね……東京に居て時々訪ねて来て呉れ！」

老母の眼にも涙が見えた。

「旦那様にも宜しく仰しやつて……」

「え、よく言つて置きますよ。あれもお前には大變世話になつた……」

「い、え、何う致しまして」

不意に「お桂は何うした？お桂！お桂！」

「い、え、四疊半に居らつしやいますから、私が参ります」

と言つて、お鐵は縁側を傳つて行かうとする處へお桂が顔を出した。で、別離の言葉がまた繰返される。

荷物と車夫が俥に運んだ。お鐵は妻皮かけの足駄を穿いて、烏渡裏の家へも暇乞に行つて來ると、門を出た。縁葉に降り蹴ぐ糸のやうな雨長く迎る柴垣から色付いた麥の黄い島に添つて急いで行く新しい蛇の

目傘。やがて低い門の中に其傘の影は見えなくなつたが、十分ほど経つと、今度は銃之助の若い細君と並んで此方に歩いて來るのが見えた。

門にはそれでもお桂も見送つて居た。

「俥を今一盃呼んだら好いでせう」

と荷物で一杯になつて居るのを見てお梅が言つた。

「い、え、ちき其處の藥王寺前に知つてるものがありますから、一先其處に落附かうと思つて居りますから」

幌を半懸けた俥は動き出した。

梅雨の降頻る中に蛇目傘を傾けて三人は別を叙した。

「左様なら」

「それでは御機嫌よう」

お鐵は俥の後に跟いて坂を上つた。其身の不運將來の不安が簾々と思出されて、涙は袖を濕した。坂の上で振返ると、縁葉に包まれた其低い

家には雨が斜に降濺いで、銑之助の若い妻の蛇目傘は今し其門内に入つて行く處であつた。お鐵は別れて来た家のことを考へながら、泥濘の深い道を歩いた。

十四

梅雨が降り続く。庭の緑葉は低い檐にかぶさるやうに蔽ひ懸つた。床の悪い畳はでこぼここと濕つて、物の微臭い醜陋しい重い空気がじめじめと人の氣を腐らせた。

主人は古い長靴を穿いて、毎朝雨を衝いて出て行く。お鐵が歸つたので家は俄かに淋しくなる。嫁のお桂はそれでも親切に病人の世話をし、遣る積であるが、何うも老母の氣に入らない。粥の加減が拙かつたり、器具の取扱が粗雑であつたり、機嫌の取りやうが調子に合はなかつたり、するので、兎角苦情が起り勝である。

老母はいつも黙つて、苦い顔をして、臥床の上に起返つて、盆に載せた小鉄の粥をさも不味さうに獨り食つた。

肩を摩りませうかなど、言ふことがあつても、滅多にお桂には頼まなかつた。嫁の身にしてはかう取扱はれるのがいかにも辛い。けれど何うかして機嫌を取らうなど、いふ心は、二十八の再婚の女にはもう無かつた。銑之助の細君に後を頼んでは、氣晴しによく隣に行く。主人が歸つて来ると、すぐ書齋に其後を追つて、くどくどと何事かを叫ぶ。別に際立つて母親の陰口を言ふ譯でも無いが、これが少なからず母親の氣色を損つた。『それ、御覧、お桂がまた二本棒どのに甘つたれて、悪口を言つてるから』と傍に侍して居るお梅によく顎でしやくつて見せた。

それに、男の兒が中々懐かない。『婆ちゃん、婆ちゃん』と、老母ばかりを頼りにして、新しい母親などは殆ど顧みやうともしなかつた。學校の世話、衣類の世話、下駄の世話——小さなことによく紛紜が起つた。

お鐵が歸つてから、お桂は男の兒を其傍に臥かした。一夜寝そびれて非常に泣いたことがある。すると老母は「お前達には任して置かれなさい、鐵も鐵だ少しも自分の子供らしい世話は爲やしない」と言つて翌晩からは自分の蚊帳の裾の方に臥かすことにした。

病人は夜寝られなくつて困つた。蚊帳の中に行燈がぼんやり點いて居る。物の影が青く暗く一室に行渡る。薬瓶と菓物の鐵詰と水差とが枕元に置いてある。中仕切の襖は閉てゝあるが、建附が悪いので、夫婦の寝て居る隣の茶の間の洋燈のあかりが透いて見える。時計の音が際立つて耳につく。と思ふと脚でも居ると見えて、時々天井で凄じい音がする。

洋燈がふつと消える。

十五

梅雨が猶幾日か降り續く。

裏の畑の麥は既に黄く、もう刈取らなければならぬやうになつた。百姓の老人夫婦が箆笠を着て、濡れそぼちながら畑に働いて居るさまも見える。路が悪くなつて、足駄を泥濘に取られる若い女の姿も見える。銚子の助は賣る當の無い長い小説に筆を着け初めた。豆腐屋の喇叭の音も雨に濕つて、御用聞の酒屋の笠からは雨滴がしといに落ちた。梅の實が黄く熟した。

ある夕暮に伸が来て門前に留つた。やがて三歳位の小兒を抱いた三十二三の髪を束ねた田舎風の女の姿が見えて、車夫は大きな風呂敷包を抱えて先に立つて格子戸を明けた。案内を乞ふ甲走つた女の聲がする。

玄關に出た主人は、

「やあ、お米か」

「兄さん！」とさも懐かしさうに。

座敷に入つて憔悴した母親の顔を見るや否

「母様何故こんな病氣になつたんだねえ」

とお米は聲を震はして言つた。

「お米か、よく来て呉れた」

「母様——」

語を半にして顔を掩つた。

中野綺の細かい萬筋の袷を着て、髪は櫛巻にして居る。色の淺黒い顔の廣い、反齒の、いかにも田舎の商人の主婦と言つた風、膝にまつはる年弱の三歳の女の兒を抱寄せて、胸をはだけて、大きな乳を合せた。

「こんなに悪いとはちつとも思はなかつたものだから」

かう言つたお米の胸はもういくらか軽くなつて居た。

「それでもよく出て来られたねえ？」

「来られるの、来られないの……何うせ無理しなきや出て来られな

いんだから」

「無理に出て来ちや後が困るだらう」

「困るツて言ふけど……親が大病なのに……私は何うしても行かなく

つちやならないツて、無理無理出て来たのさ」と少しやけ氣味な口振で

ある。

勝氣で亭主と衝突して、此迄にも出るの入るのとよく紛紜を引起した。

主人も母親も、お米のことに就いては、既に手古摺切つて居るのである。

お米は又お米で、田舎に一人置去にされて、貧しい機屋の世帯多い子供

等と亭主の意氣地無しと薄情とを胸に描いた。現に昨日出て来る時も、

亭主は機廻りにも出ないで、酒を飲んでふて寐をして居た。行くなら歸

つて来るなど言つた。え、え、え、暇を下さるなら望む所だ！と出て来た。

物心の着いた總領の娘の十歳になるのがそれと知つて泣いて追掛けて

来たのを、氣強くも振放つて来た。

「定さん相變らす分らんかねえ」

「もう仕方が無いんだもの」

「それでも商賣の方は好いんだらう？」

と病人が却つて心を痛める。

「商賣も一生懸命に遣つて呉れると好んだけど……忘れてばかり居るんだものね……」

「此頃は景氣は好いッて言ふぢやないか」

「え、足利は大した景氣、夏物はそれは大層儲かるんだよ。だから今少し身を入れて呉れ、ば好いんだけど……」

「何故あゝだらうね」

お米は黙つて居た。

母親はちツと見て居たが、

「お前また出来たね？」

「え……」

とお米は耻辱を含んだ腹立しさうな調子で顔を少し赧くした。

「幾月だえ？」

「もう今月で五月……」

「困るねえ子供ばかり拵へて喧嘩して居ちや——」

お米は黙つて低頭く。

其處に主人が茶を運んで来た。嫁のお桂は初対面だと謂ふので、衣裳を着替へて出て来る。一通の挨拶が取交される。お米は土産にと携へて来た中野絹の大名絹を一反、これはほんの印に嫂さんへ。今一反は母さんの寐衣にでもと……。

少時何ともつかず語り合つて居たが、

「嫂さん本當に大抵ぢやありませんね」

とお米が言ふと、

「いえ、もう何も行届かんもので……碌なこと出来ませんでな……」と長たらしい調子でお桂が挨拶する。ぢやらぢやらと厭らしい人だとお米は思つた。

「婆ちやん」と縁側から呼んで英男は入つて来たが、見馴れぬ客が居るので、きよろりとして立つて居る。

「英ちやん、まア大きくなつた！」

「婆ちやん、鉛筆買うんだから、お錢お呉れ」

「何です、ねえ、まア、お客様が居らしやるのに、今に、母様が上るから、お辭儀をなさるもんぢやがね」

「婆ちやん、婆ちやん」

「あ、上るよ」と病人は蒲團の下から財布を出した。

田舎の姉が見えたといふので、銚之助もやがて遣つて来た。夕暮を俄かの混雑、主人は洋燈を吊すやら、火鉢の火を見るやら、母親の

世話を爲るやら、やがて何か肴屋に行つて見て来やうと、自から傘をさして出懸けた。

嫁は勝手に七輪にばた／＼と火を起して、惣菜の準備を爲て居た。もう夜になつた。戸外は細かい雨がまた降出して、隣の二階家の勝手を洩れる洋燈の光が滲れて夕闇を隈取つた。女の兒が旨く寐たので、お米は母親の夕飯の給仕をして居たが、それも済んだので、鍋と盆とを勝手に下げて、銚之助の坐つて居る長火鉢の横に来て坐つた。

男の兒は洋燈の下で買つて来た鉛筆で、筆記帳に片假名のイロハを書いて居る。

「英ちやん、伯母さん覚えて居るかね」

英男は黙つて書いて居る。頭を上げやうともしない。衣服の袖の鍵が不圖眼に附いたので、本當の母親の無い子は可哀相だと思つた。

銚之助に、

「好いお嫁さんが出来たつてね」
「何アに」

「年は十九だつて」

「うん」

「兄様もお前も皆な身が決つて、母様は安心だ」

「うん」と銑之助は今日の新聞を見て居る。

「これで母様さへ丈夫だと好いんだけれど……」

「本當さ……」

新聞を傍に置いて、

「少しは看病して行つて呉れられるんだらうねえ？」

「するともね……今度は其積で出て来たんだから、一月や二月……」

「そうして呉れると、母様も心丈夫だ。此處の嫂さんでも家の先生でも、他人だからねえ。肉身のものが居なくつちや……」

「さうともねえ」

不圖顔を寄せて小聲で、「母様餘程悪いんかえ？」

銑之助は唯點頭いて見せた。

「後で詳しく聞くけども……困つたねえ」

と小聲で顔を曇せる。やがて、

「秀雄も丈夫だらうねえ」

「うむ」

「来られないのかねえ」

「その中暑中休暇になつたら、来るツて言つて寄越した」

「久らく逢はないがねえ立派になつたらうねえ」

「うむ」

「まだ中尉にはなれないんかねえ？」

「さう早くはなれんさ、年限があるからなア、來年だらう」

『中尉にでもなれや好いお嫁さんが取れるねえ』とお米は笑顔になる。

『うむ』
銚之助は氣乗がせぬといふ風である。

玄關の格子戸が明いたと思ふと、『折角御馳走しやうと思つて行つて見たが何にもありやせん。此處等は田舎だからなア』と言ひながら主人は入つて来た。少時すると其處に茶湯臺が開かれて兎に角に鮎の刺身豆腐汁蠶豆飯が足りぬので、笹蓑が六箇ほど並べられた。徳利が一本主人は猪口を銚之助に差した。

病人は久し振で娘に逢つたので機嫌が好い。常に似ぬ明かな賑やかな夕飯の團樂田舎に住んだ頃の物語も出て誰彼の時も盡きない。氣が付くとお米は長女の泣顔をも忘れて居た。

十六

お米とお桂とはすぐ衝突した。

母親の世話をお米がすればするほどお桂は除け者にされたやうな不愉快な氣がする。お米はお桂が厭にちやらくして碌々病人の看護を爲ないのを腹立しく折につけてチク／＼と當る。それでも最初の中はお互に腹の中で思つて居るだけで餘り素振にも顯はさなかつたが、二三日來母親の病氣が思はしくないので家の中の空氣が何處となく陰氣で、重苦しく氣が快惱する。かういふ時には兎角感情の衝突が募るのである。

梅雨時の勝手の汚いのが奇麗好のお米の神經を殊に刺戟した。大瓶の水を汲むと底から塵滓が子子と共に湧き上る。流しには飯粒がすつかり流されずに残つて居る。鍋や皿も洗はずに一隅につかねて置く。戸棚を明けると、微臭い臭氣が鼻を衝いて皿やら椀やら醬油さしの汚れたのやらがだらし無く散ばつて居る。お米は貧乏はしたが勝手を汚く

して置くことは大嫌である。で、一日朝から雲切れがして、碧い空が晴がましい日の光を珍しく四邊を照らした時、お米は甲斐々々しく女の兒を負つて蒲團を干す、寝衣を干す、下駄を干す、果ては跳足になつて、大瓶の水を汲み替へ、足駄の泥の堆く積つた水口を掃除した。

嫂も流石に見て居る譯に行かぬので、戸棚の中を頻りに掃除して居る

「嫂さん私が爲るから」

とお米が言つた。

別段何の意味でも無い。唯鳥波言つただけである。けれど互に反目して居るので、これが尠なからずお桂の氣に觸つた。自分の爲てること綺麗であらうが汚なからうが大きなお世話だといふ腹になつて、ツイ向ふに行つて了ふ。

其態度がお米の癪に觸つたが、何構ふものか、汚いから奇麗にするのだ

といふ調子で、さつさと片附けるものは片附け、洗ふものは洗つて了ふ。

勝手の掃除を済して、今度は洗濯に取懸る。

「嫂さん兄さんの汚れたものを御出しなさいな、次手だから……」

と、四疊半を覗きながら態と言ふと、

「いゝえ、好んですよ」

と、辟ばかりする。

「好いことは無いぢやありませんか。汚れて臭くなつたのがあるぢやありませんか。遠慮をせずにお出しなさいッてば……」

「私が後で洗ひます」

「後だつて、蒸からでは乾きませんよ。明日は天氣だか何だか解りやしないから」

「いゝえ、私が洗ひますから」

辟が尖つて居た。

「構はんでお置きな……あゝ言ふんだから」

と頭の上で饒舌られて喧しいので病人が口を挿んだ。

「本當に何うかしてるよ、馬鹿々々しい」

とお米は口の中で呟いて井戸端に行く。細釣瓶を繰る音がして、やがて洗濯の音がざぶ／＼と聞える。

たまさかの美しい天気病人は自づから蒲團の上に戻り返つた。縁側には蒲團や掻卷や衣裳やらがすらりと並べて干してある。病人は庭樹の繁茂と空の碧とをじつと見て居た。一月前から見ると著しい衰弱である。皺の寄つた顔の色は黄く濁つて、鋭い眼ももう其の光を失つた。齒の抜けた口は締りが無く、無造作に束ねた髪は白く、胸の四邊は見るに堪へぬほど細く瘦せて、もう長く此世の人ではないことは一目で解る。病人は瘦せた手を無意味に自分で繰り上げて見て居た。

十七

終日病人が苦んで、漸く落着いたある夕暮に、お米は子供を抱いて裏の家の縁側に腰を掛けて、銚之助と話して居た。

「何うもあゝ苦んでは困るねえ」

「本當だよ」

「何うか爲やうが無いもんかねえ」

「随分手を盡したんだから」

「それや兄様もお前も居るんだから充分なことは爲たんだらうけれどねえ」

「あの病氣ちや何うも仕方が無い」

お米は嘆息を吐いて、「これから樂が出来ると謂ふのに、母様も不運だねえ。これからならお前もかうして別になつて居るし、秀雄だつて母様

一人位何うにもなるんだから厭なら兄様の處に居なくつても好い身分になつたのに……」

『本當に不運だ……』

と銚之助も嘆息して、『痛くなると苛々して、手も附けられないやうになるけれど、せめて看病でもよく爲て遣つて下さい』

『それア爲るともね……その爲めに來たんだから……けどもね、嬢さんといふ人は餘程ひどい人だねえ』

返事を爲すに銚之助が居ると、

『碌々母様の世話なんか爲やしない。四疊半に引込んでぐづぐづしてゐるんだからねえ。先程なども左様だらう。あんなに母様が苦んで居るのに、顔も出さないんだから。本當に呆れて了ふよ』

『だから肉身のものでなくつては駄目だと言ふんだ』

『肉身のものに越したことはそれやないけれど、あんな嫁さんたらあり

やしない。口惜いから私ぐんぐんして遣るのさ。母様の世話でも、英男の世話でも構はず爲て遣るのさ。……とねあれでね、兄様に吩咐けるんだよ。子供ちやありやしまし、三十近くになつて、べたぐん亭主にひつ附いて泣いて見せたり、笑つて見せたりしてゐるんだから厭になつちまうよ。……だから母様だつて怒るんサ。あんな嫁はありやしない』

すぐ後を續いで、

『此間もね、夕御飯を食つてると、兄様がね、「お米お桂もまだ馴れない處はあるだらうが、此場合だから仲好くして看病して呉れ」と言ふちやないか。あの兄様だから私は別に何とも思ひやしないけれど、あのお桂づらが吩咐けたんだと思ふと、腹が立つてね。「何も仲を悪くしたつもりはありませぬ」と言ふと、「お前は母様の世話さへ爲て呉れ、や勝手のことなどしなくつても好い」と言ふのサ。私はぐつと胸に來たから、うんと言つて遣つたよ。私はいくら田舎者だつて貧乏だつて物の道理は心

得て居るからねえ』

『まア仕方が無い、そんなこと言たつて』

『それや私だつて、嫂さんだから、向ふでちやんとして来りや、立派に立て置くんだけれど、……餘り馬鹿にしてるからサ』

『さう勝氣にばかりして居ても困るよ』

『だつて本當に癪に觸るんだもの。私や来てから二三日しか経たない頃だつたから黙つて居たがね。母様が鳥渡何か難かしいことを言つたんだよ。すると、兄様が「そんな難かしいことを仰しやつては困る。お桂は母様の看病ばかりしてゐるんぢやないから」つて言ふぢやないか。私や餘りだと思つた。兄様もあんなことを言ふのは悪いが、あのお桂が焼附けるから、あんなことを言ふんだ。私は口惜くつて涙が出たよ』

『母様も難かしいから、つい兄様もそんなことを言つたんだ』

『いくら難しいたつて、餘りぢやないかね。あの病人にサ……何時死ぬ

か解らないほどの病人に……』と頻りに激昂する。

『まア然し——』

『ナアに、彼奴等に看病して貰はなくつても好い。私はどんなに手を盡して、いも看病して上るから』

『それが悪い』

『悪くつたつて好いよ』

と益々激昂する。

『だつて姉さんが好くつたつて、さう仲たがひを爲れて居ちや、病人も氣まづいし、兄様も困る……』

お米は少時黙つて居たが、

『本當に厭つたらしい女ッちやありやしない。だから私や、成たけ口を聞かないやうにして、側にも寄らないやうにしてゐるんだよ、腋臭でそれア臭いから』

と態と顔を盛めて見せる。

「姉さんも相變らず勝氣で困るねえ」

と餘り可笑いので銑之助は笑つた。

「兄様も女房運の無い人だ。あの毬髮の腋臭の臭い——」

「まア、そんな悪口は好いちやないか」

「まだ來てから二月も経たないのに、結構女房面してるんだから、痛に觸らアねえ。それも充分種々なことが出来るんなら、まだ勘辨のしやうもあるけれど、英男の世話も碌々出來ない癖に、此處は自分の家だと言ふ腹があるんだからねえ」

「それは左様だらうさ、細君だから……」

「あんなことを言ふ。お前も解らない人だねえ……。あんな女に、吉田家を搔廻されてたまるものかねえ。私は出た本家だから何時でも歸つて來て幅で居るよ。あんな女にへいへいして居られるもんか」

「それア小さくなつて居なくつたッて好いさ。仲好くしてさへ居れや——」

「誰が小さくなつて居るもんか」

子供が泣出したので立つて、はいく庭を掃つて歩いた。顔には感情の激した痕が名残なく見えた。銑之助の全然同情をせぬ口振に一層烈しく激したのである。

「此頃は本を讀むかえ？」

銑之助は暫くして尋ねた。此姉が娘の時分太閤記や楠一代記などをよく讀んで秀吉や正成や清正を理想の男子としたことを思ひ出したのである。

「本など讀む暇は無いものねえ」

「それでも氣晴しに少しは讀む方が好い」

「講釋なぞ家で何うかすると買つて來るけれど、あんな人情本は面白く

ないからねえ』

『八犬傳でも讀めば好い』

『何處にも無いもの』

『下の家にあるよ。兄様が持つてるよ』

『さうかえあるかえ』とさも喜んだといふ風で、

『本當にあるかえ』

まだ昔の若い血が流れて居ると見える。

姉はやがて歸る。

銑之助は一人になった。妻は湯に出懸けてまだ歸つて来ない。不圖立上つて座敷の縁側に行つた。其處には四五日前に買つて来たハンモックが吊されてある。藤椅子が買へぬので、せめてこれに由つて空想に耽る快樂を得やうとしたのである。買つて来るとすぐ釘を柱に打付けて具合の好いやうに吊つて、妻とかはる／＼身を此上に横へて、夕焼の雲

夕の星を見た。妻の爲めに軽く揺つて遣つたこともある。

銑之助は例の如く身輕にそれに乗ると、餘力でハンモックが軽く心地よく揺る。もう薄暮である。夕照の餘影を受けて一時美しく榮えた雲も消えて、向ふの丘の樹の上に星が閃々と光つた。

母親を思ふの念が胸にこみ上げて来た。自分ながらその餘りに多感なのを知つては居るが、何うもそれが容易に押へ切れない。醫師の宣告をも知らずにまだ治るものと信じて居る母親の心を考へると胸が壓つけられる様な氣がして涙が出さうになる。

笠が一箇開放した座敷を抜けて、ハンモックの上を飛んで行く。

郵便脚夫が門の郵便受函にがさこさと手紙を入れて行つた氣勢がした。昨日頼んだ新聞小説の話が纏つたのかも知れぬと思つて、銑之助は慌て、ハンモックを下りて、下駄を突懸けて取りに行つたが、間に透して見ると、吉田秀雄といふ大きな字が微かながらも眼に入る。

弘前の弟からであつた。

豫期と違つたので、稍失望したが、其儘茶の間の六疊に上つて、暗くなつたら點けて下さいと妻が吊して行つた洋燈にマツチを摩つて火を點した。そして其下で、封を截つて手紙を讀む。

大きな字で、巻紙の一行に五六字位しか書いて無い。旨いやうな拙いやうな自己流の筆蹟で、其文がまた思ひ切つて露骨である。候といふ字があるかと思ふと、處々文章體になつたり言文一致になつたりして居る。戯談もあれば眞面目な用事もある。母親の病氣のとも種々心配して書いてあつた。

軽い足音がして細君が歸つて來た。

湯上りの顔はほんのりとして、薄く化粧した頬のあたりが美しい。ランテルの單衣を着て平常のメリンズの帯をして居る。銑之助の手にして居る手紙を見て、

「何處から？」と訊く。

「弘前から」

と銑之助はお梅に渡す。

お梅は一通りざつと見て、

「相變らず戯談を言つてますね」

「お前の舌が冷かして書いてあるだらう」

「え」と笑顔になる。

「餘程調子が變だよ。あの琴の娘が戀人になつたんぢやないかと思ふね」

「さうでせうか」

「だって此處にかう書いてあるぢやないか」と手紙を展げて見て、「此處に、さら「琴の先生と一緒に……」と書いてある處があるだらう。其處がおかしい。」

「左様ですなえ」

「屹度もう戀人になつたんだ」

「さうかも知れませんか」

と出流れの茶を茶碗について飲んで

「どんな人でせう？寫真でも送つて寄越せば好いのに……」

「今度寄越せつて言つて遣らうか」

「え」と言つたがすぐ

「別嬪さんでせうなえ？」

「何うだかなア……。顔は綺麗かも知れないけれど、津輕辯では仕方が無い」

「さうですなえ」

「高等女學校に行つてるとか何とか言つてたなえ……此間来た時」

「え、さうですよ。此間も私にね、嫂さん小學校卒業した限りだらうッ

て言ふから、さうですよ、私行きたかつたけれど、家の都合で行けなかつたつて言ふと、駄目だナアツて言んでせう。私きまりが悪かつた。そして、あとで僕の居る家の娘は高等女學校に行つて言ふぢやありませんか

「馬鹿にしてる」

と銚之助は笑つた。

「そして何時出て来るんです？」

「此處には何にも書いてないが、暑中休暇になつてから来る積だらう」

「さうすりや八月ですな」

「さうさ」

「母様あんなに悪いのにもつと早く来られないんでせうか」

「来られないツて言ふことも無いだらうがね」

「早く来るやうに言つて遣る方が好いでせう」

「さう言つて遣らう」

「もしものことなどありやしますまいと思ひますけれど……何うせ看
病するなら、早い方が好いですからねえ」

「左様だよ、兄様も今日さう言つて居た」

お梅はふと縁側に夏の座蒲團が出て居るのを見て、

「どなたか来て？」

「何アに、田舎の姉が鳥渡……」

「私が行くとすぐ？」

「うむ」

「何か話があつて？」

「何アに、いつもの勝氣で困つて了ふのさ」

「嫂さんのことを何か言つてツたんでせう？」

銚之助は點頭いて見せる。

「何んなことを言つて」

「何アに悪口さ」

「何故あゝ仲が悪くなつたんでせう」

「勝氣だからいかん」

「さうですなえ、少し勝氣ですなえ。餘程母さんに似て居ますなえ」

「兄弟で一番似てるさ」

「貴郎も似てますね？」

「さうかな」

「性急で、氣難くつて、私はらくくすることがありますよ」

「それや親子だから、いくらか似てるさ」

「秀雄さんも、何處か似てる處がありますよ。何うしても兄様が一番沈
着いて居らつしやる」

「お前だつて左様だ、小石川の母様は瓜二つだ」

『さう……』

と莞爾する。

「此間杉田が來てる時誰かの女の寫眞の口繪を見たと……さうく何とかいふ子爵の家庭の寫眞さ。子爵と子爵夫人と令嬢が二人その總領の娘が中々別嬪さんなんだが子爵夫人に酷肖でよくもあゝ似てると思ふ位なのさ。すると杉田がいくら別嬪でもこれが子爵夫人のやうな婆様になるんだと思ふと色も戀も無くなるツて言ふのさ。そして君のフラウもムツテルによく似てゐるねえ！と言ふぢやないか。」

『ムツテルツて何？』

『フラウが妻君、ムツテルが母』

と笑ひながら銑之助が解釋する。

『杉田さん、そんなこと言つて？』

『うむ』

「酷い人ねえ今度來たら言つて遣るから好い。」
『だって仕方が無い、己もさう思つて居るもの年を取ると小石川の母様のやうに腰をまげて、あゝした調子で御世辭なんか言ふんかと思ふと厭になつちまふ』

『まさか、私が……』

とまた莞爾した。

『それから姉様何んな悪口を言つて？』

『腋臭だの毬髮だのツて随分酷いことを言つたよ』

「私は田舎の姉さんも酷いと思ひますよ。何もあんなに當り散らさなくつても好いんですもの、此間も餘り酷いもんだから、兄様怒つて居ましたよ。そんなに喧嘩ばかりしてゐるんなら邪魔になるから歸つて呉れつて。すると姉さんも負けぬ氣で私や母様の看病に來たんだから、歸る譯が無いツて言つてました』

『本當に困るよ』

『娘さんだッてそんなに悪い人ぢやないんですもの』

『さうともさ……。だから兄様は初めから田舎の姉の來るのを餘り望んで居なかつたんだ』

若い夫婦は猶少時語つた。やがて銚之助が座敷に行かうとすると、

『今夜も遅くまで御書きなさるの？』

『うん』

『今夜は早く仕舞ひませうよ』

『まア、少し書かう』

銚之助は妻の淋しいのを知ては居るが、さりとて自己の生命なる創作を意味なく留めるには忍びなかつた。で、其夜も遅くまで机に向つて、澁り勝なる筆を動した。机を離れた時には、若い細君は既にいきたなく假睡をして居た。

十八

お米が来て、好いこともあれば悪いこともあつた。女の兒が際立つて、羸弱なので、鳥渡何かするとヒョー／＼と泣く。それにまだ締が無いので小便大便をよくしくじる。襦袢の汚れたのが彼方此方に散ばつて、悪くすると御馳走を踏附けることなども尠くない。銚之助は子供が嫌ひなので、泣聲を聞くと、さも不愉快さうな顔をして、時には『よく泣く子だねえ』『姉さん、それ早く騙したら好いちやないか』などとつけ／＼いふ。するとお米はすぐひがんで、其身が貧乏で無教育な夫を持つて居るばかりに、兄弟にまでもかう馬鹿にされると思ふ。何もそんなに邪魔にしなくつても好さうなものだといふ腹になる。『子供の泣くのは當り前だがねえ……。』と顔色をかへて、フイと立つて縁側に行く。胸を半分ほど露はに大きな乳をだらりと出して、早五月の眼に立つ腹を抱えて、無作法

に振舞つて居る形は餘り好ましいものではなかつた。

主人はそれでも其女の兒をよく可愛がつて遣つた。抱いたりあやしたりするばかりではなく、偶には何か玩具などを買つて來ることもある。色の黒い、おでこの毛の赤い、それは醜い子であるのに、其笑ふのが可愛いと云つてはよくあやした。

病人はお米を力にして居るが子供の泣聲とその田舎風の無作法と氣の勝つた所置振とは矢眼脈であつた。お桂と衝突するのも好いが其が延びて主人と衝突し、銚之助と衝突し、銚之助の若い妻と衝突するのを見るのは餘り好まなかつた。お米の身にしては、田舎のことが苦勞になる長女の泣顔が氣に懸る、夫から手紙が一本も來ぬので愈々心配になる。衝突はするものゝ、それがまた不愉快で居心地が悪い。

かういふ状態の中に母親の苦痛がをり／＼織込まれる。梅雨は稍々晴れ氣味で心持の好い光線が雲の間から洩れるやうになつたが、一家は

相變らず暗かつた。

『お米さん、私何處が悪いんぢやか、言つてお呉れよ』

『嫂さんのやうな人には……』

『だからさう言ふぢやがね』

『好う御座んすよ』

とお米は聲を尖らして座敷に行く。ある日曜日のことであつた。

主人は茶の間に居たが、勝手をのぞき込んで、

『又何かしてるのか』

見るにお桂は戸棚の前に立つて、顔を掩つて口惜しさうにして居る。

『何うしたんだ？』

主人から聞かれても、小言を言はれると思つて黙つて居る。

『困つた奴等だナ』

と苦々しさうに主人は言つたが、強ひて荒立てるにも及ばぬので、深く

追究もしなかつた。

「一時間ほどしてから、銚之助の細君が遣つて来た。すると、お桂は手眞似をしてお梅を勝手に鳥渡と呼んだ。主人は病人の傍に行つてもう茶の間には居なかつた。お米は玄關の傍の檜の樹の涼しい蔭に盥を持つて来て、いぎたなく睡つた子を負りながら頻りに洗濯をして居た。でお桂とお梅とは長い間、勝手の手戸の前で何事かを話し合つた。お桂の饒舌る低い聲の絶間に、『えゝえゝ、さうですとも』といふお梅の聲が度々交つた。

「本當にあんな女つたらありやしないがね。天道様ちやんと見て居らつしやるから」

「えゝえゝ、さうですとも……」

其處に生憎お米は洗濯石鹼を取りに来た。

銚之助が鳥渡家を明けて遣つて来て、主人と長火鉢に相對して座つて

世の常の會話に耽つて居ると、洗濯を終つたお米は縁側から茶の間にあがつて、眼を覺して頻りにむづかる背の兒をぐるりと巧に自から廻して下して、其處に座つて乳を合せた。穩かならぬ氣勢が其顔に歴々と現はれて居た。

お梅は夫が来たので、代つて家に歸るべく母親に挨拶して茶の間に来た。とお米は突如

「お梅さん、先程何を話して居たの？」

「え？」

調子が烈しいので、若い細君は驚いて義姉の顔を見る。

「先程勝手に嫂さんと何を話して居たのさと聞くんですよ」

それと覺つたお梅の顔は俄かに赧くなつた。

「聞いて居ないから好いと思つて人の悪口を言つて本當に左様だの、何だのッて、餘り人を馬鹿にして居るよ。私が悪けりや悪いとちやんと前

で言ふが好ぢやないか。

真向から痰阿を切られて、お梅は其處にすくんで了つた。

「何うしたといふんだ？」

と主人が真面目な顔でお米の方を見る。

「何うしたッて……兄様先程石輪を取りに勝手に行くよ、嫂さんとお梅

さんと二人で一緒になつて私の悪口を言つてるんだよ、あんな悪人は無

いの天道様が見て居るのッて……」と聲を震はせて、「悪人でも何でも

好い。大きな御世話さ。」

いかにも口惜しさうで、出懸つた涙を袂で拭つた。

「また、そんなことを言つて、困るぢやないか」と主人は和めにかゝる。

銃之助も顔を曇らせた。

「いくら私が貧乏したつて、餘り馬鹿にしないが好い」かう言懸けたお

米の聲はもう泣饒舌になつて居た。「本當に、いくら私が田舎者で貧乏生

活をして居るからッて……」

「お前はすぐひがむからいかん、誰が貧乏だッてお前を馬鹿にした？」

「誰ッて、皆な馬鹿にしてるぢやありませんか」

「お前は氣ばかり勝つて、何ぞと言ふと、すぐひがんで仕方が無い」と言

つて、主人は、「お桂—お桂—」

病人の傍に行つて居たお桂は立つて其處に來た。

「お前、お米の悪口なぞ言つたのか」

「いゝえ……」

「そら、あゝしらゝしいことを言ふ。私はちやんと聞いて居ましたよ。」

主人は強ひて深く追究せず、

「本當に仲好くして貰はなく、つちや仕方が無いぢやないか。お前は何

しに此處に來てるんだ。母様の看病をしなくちやならんのだぢやないか。

お互に譲合つて、氣まづいことがあつても我慢して、少しでも母様の世話

をするのが本當だ。それに下らんことに唯合つて滑つたの轉んだのツて文句ばかり言つて居る。お桂もお桂だ。何も知らないお梅にまでそんな智慧を附けなくつたツて好いぢやないか』

お桂は黙つて居た。

主人は傍に小さくなつて座つて居るお梅に向つて優しい調子で、

『構はずお歸り家が留守になつて居るんだから』

お梅はこれを好い機會に丁寧に挨拶して、夫の顔を鳥渡見たが縁側から駒下駄を突懸けて戶外へ出た。久留米紺紵にメリンスの帯をした丸鬘姿が夏の日影にくつきりと際立つ。

後で又一しきり難かしい話が續く。

『一體何うしたんだ？』

『何うしたツて、兄様、私は馬鹿にされて、邪魔にされて黙つて居やしませんから。悪人だの何だのツて……』

『お桂、其様こと言つたのか？』

『いゝえ——そんなこと言つたんぢやありませんがね、お梅さんと鳥渡話をして居たばかりですがね』

『そんなこと言つたツて駄目ですよ。私ちやんと聞いて居たんだから……』

お米は口惜しい。一生懸命にかうして世話に来て居るのに子供が邪魔にされたり泣くのを喧しいと言はれたりするのがいかにも残念である。母親は不治の病氣、嫁達に兄弟は好いやうにされて、萬一を頼む實家もかうした有様になつたのかと思ふと、其身の不運が胸に迫つて今更のやうに悲しくもなるのである。

『兄様、私に悪い處があるなら、ぐんぐん言つて下さい。陰口を聞かれるのは、私は大嫌ですから』

『お桂も陰口などを言つてはいかんよ』

と主人は妻をたしなめた。

「お梅さんにもよく言つてお呉れ！」

とお米は銚之助に向つて言つた。其聲が稍尖つて居たので、

「お梅はそんなこと知りませんよ」

「だつて言つてたんだもの」

「言つてたつて何だつて……お梅は姉さんの悪口などを言ふ柄ぢやないからね……姉さんも餘り勝氣過ぎるよ」

銚之助は激して居るので、ついかう言ふと、

「私も勝氣だらうけれど、嫁さんを庇ふばかりが男ぢやないよ」あんな肥つた女が何處が好んだらうといふ腹がお米にある。

「庇つたつて好いちやないか」

「それは好いともねえ……」

「好いければ、そんなこと言はん方が好い」

「だつて男が嫌だんに鼻毛を長くしてるのは、見つともないよ」

「大きな御世話だ？」

と銚之助は激して了つた。

「まア、好いよ、そんなに言はなくつても……」

と主人は聲を和けて、「お梅の知つたことぢやない。お梅にそんな悪氣はありやしない……。お米も悪い。そんな餘計な口を聞かんでも好い。」

「だつて餘りだからサ」

「馬鹿な！」

と銚之助は言つたが、其儘フイと立つて病人の傍に行く。

病人はむかう向きに寝て居た。夏の晝の暑く、軽い掻巻も後に遣つて、綿入の寝衣を胸の上に懸けて居た。

「母様何か上げやうか」

病人は大儀さうに寝反をして、銚之助の顔を見た。非常に憔悴したと銚之助は思った。もう一月持つか持たぬかと言つた醫師の言葉を思出した。

「何も食ひ度くない？」

病人は軽く點頭く。茶の間では、まだ其悶着が續いて居るらしく、お米の早口と主人の緩やかな聲とが聞える。をり／＼お桂の聲も交る。中仕切の襖が一枚開いて居るので、此方に向いた病人の眼にも、お米の後姿と長火鉢と時計と主人の顔が見える。

「何を言つてるんだい、先程から」

「何アに、詰らんことさ……」

「泣饒舌に饒舌つて居るぢやないか」

「姉さん困るんだ詰らんとを言つて……」

「何うしてあゝだらう？」と言つたが急に、聲を高くして、「お米！ お米！」

！……お桂も病人を置いて何をべちやくちや饒舌つてるんだ！
で、茶の間の悶着は静まる。お米は兒を抱いて縁側から庭に下りる。
お桂は勝手に行く。主人は病室に入つて來た。前の低い田畝を越した
小學校からは生徒の體操をする聲が賑かに聞えて來る。

十九

小衝突の中に日は經つた。
病人は次第に悪くなつて行く。腹の痛いのもさうだが、此頃はわけて
氣難かしくなつて、機嫌の悪い時は手も附けられないので、看護する者は
一方ならず困つた。食物が第一喧しい。珍しいもので毒にならぬもの
は容易に手に入らない。牛乳は昔人の習で、臭をかぐのも厭だといふ。
それに、二三日此方著しく症状が進んでも、もう起返ることが出来ない程に
衰弱した。それで居て、神経は反對に昂奮して、よく物を抛り附けたり何

かする。誰彼の差別なく叱り散した。

お桂とお米は絶えず衝突して居た。けれどそれが素振にでも顯はれると、病人はすぐ腹を立てた。「お前達は何をしに此處に來てるんだ。喧嘩をするなら向ふに行け」と痢の高い聲で怒鳴る。主人を捉へては「お前は一人の親を見殺しにしても好いと思ふのか何故立派な醫師に懸けて呉れぬのだ！」と烈しい調子で責める。ある時銚之助が少し氣に入らぬことを謂つたら、「馬鹿！馬鹿！小説を書くの何のツて生意氣だ。そんなことで小説が書けるか」と罵つた。

此間までは女の兒が少し位泣いても、「小兒の泣くのは仕方が無い」と謂つて居たが、此頃は「喧しい餓鬼だ、お米をもう歸して下へ」とよくいふ。實の娘ながらお米の苛々した調子が煩さく、大きな腹を抱えて居る醜い形に顔を盛めて、「本當に人間の屑だ。満足に育てることも出來ないで、餓鬼ばかり産むなら犬猫でもする」などと悪罵を加へる。

ある夜、腹が痛んだので、誰か來て呉れ！と呼んだ。主人もお桂も晝間の看護に勞れて熟睡して居た。當番のお米も病人がよく眠つて居るので、鳥渡と思つて四疊半に行つて今寝たばかりである。二聲三聲呼ばれて、漸く目が覺めて蚊帳の中から出て來たお桂の扮装はだらしがなかつた。髪が亂れて胸がはだけて、寝衣の帯は解け懸つて居る。病人は痛い腹を押へながら、「くつゝいて寝て居るばかりが能ぢやないぞ！」

お桂は聞かぬ風をして、

「押へませうか」と近寄ると、さも汚らはしいと言つた態度をして、

「録！録！」

主人が起きて來ると、

「録！お前は親の恩を覺えてるか」

「……………」

「女房と寝るばかりが能ぢやあるまい。親がかうして苦んで居るのを、

知らずに寝て居て、それで孔子様に濟むか。

主人は答へる術を知らなかつた。

「親が……子供を育てるのは一通ちやないぞ。御前達がかうして成長くなつたのは、誰のお蔭だ。」

病人と思へぬ程辭色が烈しい。

「母様そんな無理を仰しやつたつて困りますな。つい、寝込んで了つて、眼が覺めなかつたんですから。」

「もう、好い、御前達の世話にはなりません。寝てお出で……」

「そんなこと仰らずに……」

「好いよ、世話にならない、私は一人で死ぬから。」

萬事が總てかういふ風に難かしい。

何ぞと謂ふと、「親の恩を忘れたか」といふ。「親は死んでも御前達は悲しくないだらう」と突込む。いつもの皮肉が一層烈しく鋭くなつて、

人の弱點を扶ぐるやうに刺す。かと思ふと、心細い、悲しい、氣も滅入つて了ふやうな弱いことを言ふ。心底から出たやうな情のある訓誡を縷々として説く。心の状態が著しく極端から極端へと走つて神經が絶えず動搖した。感情が總て發作的で容易に取留がつかなくなつた。意識しないまでも、「とても治らぬ」といふ恐ろしい事實が既に其胸を蠶食し始めたのである。

ある時何か思出して泣いて居るので、

「何うか爲さいましたか」と訊くと、

「録！死ぬのが厭だ。こんな好い娑婆に生れて來て子供等も皆な大きく立派になつたのに死ぬのは厭だ！」

堪へ難いやうに泣く。

「そんなことはありませんから安心して居らつしやい」

「いゝえ——もう死ななけりやなりません。治る、治ると醫師は言つて



生

呉れますれど、もう死ななげやならない』
と顔を蒲團に押付けて益々泣く。

いくらなだめても賤しても醫師の言つた望の多い言葉を態と選んで聞かしても駄目であつた。氣が弱くなると子供のやうに弱くなる。

『父様に草葉の蔭で逢つて子供等が皆な丈夫で成長くなつて銚には嫁が出来たし、秀は立派な父様の後継者になつたつて話したら、何んなに喜ぶか……』と歎息をして、『父様は今生きて居れば六十五、まだ其年頃で丈夫な人はいくらもあるのに、御國の爲めとは言ひながら、早く死んで、當に可哀相だ……。老人子供の世話で碌々樂もせず……』
聲を飲んで、

『それから思ふと、私など樂もした。面白いことも見た。もう死んでも残り惜しいことは無いけれど……』
お米も顔を掩つた。

「母様もうそんなこと仰らんで、治つて戴かなかつては困りますよ」と
銚之助が言ふと、

「この體ではとても難かしい。」と銚之助を見て、「お前は覺えて居るだらう、父様は一番お前を可愛がつて……根岸に居る時よくお前を伴れて、新しく出來た田圃の金魚湯に行つたものだよ。覺えて居るだらう」

と常に聞馴れた話ではあるが、平生平氣で面白く聞いて居た時とは違つて、かうした場合しみんと胸に沁みた。

「死んだら、お墓參などをして呉れなくつても好い。花などを上げて呉れなくつても好い。」言ひ懸けて顔をしかめると思つたら、涙がほろ／＼と溢れた。「兄弟仲好くしてね、養生をして、長生をして、楽しく世の中を送つてお呉れ」

常に難かしい母親であるだけに、一層此言葉が人々の胸を刺した。

「お桂は？」

『鳥渡使ひに行きました』

『お桂にもよく云つて呉れ、ナア録や、仲なぞ悪くしないでお互に助け合
つて……短かい世の中だから何でも楽しく送らなけりや……それから
お米も、餘りケン／＼言はないやうにな……。これは遺言といふ譯ぢや
ないが……』

『もう、母様そんなこと……』

お米は堪へられぬといふ風で遮つた。

一座は暫し沈黙に落ちた。

母親の一時の感情的發作は暫くして静まつたが、ふと或事を思出した
らしく、銚之助に、

『お梅は懐妊したやうだね？』

『さうですか』

と言つた銚之助の顔は赧くなつた。

『知らないのかえ？』

『何だか體は變だつて言てましたけれど』

『此間庭で梅を喰べて居るのを鳥渡見たし、體がいかにもだるさうだか
らねえ』

『けどもまだ何だか解らんでせう？』

『さうの様だよ』

とお米は少し笑ひ氣味にいふ。

午からお梅が看護に行く、母親は常に似ず莞爾して居る。懐妊を聞
かれたと夫が話したので、屹度何か言はれるだらうと、初めての身のさま
りが悪いやら、耻かしいやら、怖いやら、小さい胸はそいろにさい波を立て
て居た。

機嫌が悪く、皮肉でも言はれたら何うしやうと思つて來た身には、姑の
笑顔が此上なく嬉しかつたが、それでも何だか顔を見られるのが面伏の